転生者を逮捕する警察D

ガンダムラザーニャ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海鳴市、そこでは今ある事件が起きている。

それはエルトリアから来た謎の存在による襲撃、それは神によって特典と呼ばれる力を与えられた転生者による犯行。

平穏な街は今混沌に満ちようとしている。

そんな街の平和を守るために立ち上がったのが正義のヒーロー『警察戦隊パトレンジャー』

彼らは時空管理局の魔導師と共に、様々な事件の解決に向かい、転生者の逮捕に尽力を尽くすのだった。

そして更に、同じく転生者に立ち向かう『怪盗戦隊ルパンレンジャー』との出会いで、物語は加速していくのだった。

この作品は『転生者を更正する警察集団』のリメイク版です。

ボルメテウスさんの『特典を盗む怪盗　R』とも合同予定です。

目次

プロフィール0：警察は逮捕に向けて動き出す ―――― 1
プロフィール1：警察は犯人の無力化を図る ―――― 13
サイドプロフィール：バン ―――― 26
サイドプロフィール：かこ ―――― 47
サイドプロフィール：アストルフォ 69
プロフィール2：警察は現象に興味を抱く ―――― 87
プロフィール3： 少女たちとの邂逅により事情を知る ―――― 94
プロフィール4：警察は喫茶店に寄り出会う ―――― 103
プロフィール5：謎の少女は少年の好奇心を掻き立てる ―――― 107
プロフィール6：沈殿と隕石の中を少年少女は駆ける ―――― 111

プロフィール０：警察は逮捕に向けて動き出す

街の外れにある廃工場、そこに1台のワンボックスが停められて、中から男が何人もの子供を連れて廃工場の中に入る。
「おらっ、さっさと歩けクソガキども！」
男の怒号に怯えながら子供たちは入れられて、汚い床に叩き付ける。
しかも全員手を後ろに縛られてるため上手く立てない。
「何で、何でこんなことするの…？」
そんな中で一人の子供が勇気を振り絞って男に質問するが、男はそんな子供を蹴飛ばし、それを見た子供たちが怯える。
「ひぃっ！」
「怯えてんじゃねぇぞガキどもが!!
これからてめぇらは商品として売りつけるだからな！」
「しょ、商品？
何なの、この人、何を…！」
「だからさ…」

そう言うと男は一人の子供の胸倉を掴んで持ち上げる。
「てめぇらみたいな見た目が上玉のガキを欲しがる連中がいて、お前らを売れば大儲けさ。
そんで金を稼いでがっぽがっぽってやつさ！」
「や、やだぁ！
お家に返して…！」
子供がこれから自分たちが何をされるのか理解したのか、必死で抵抗しようとするが男には何のダメージにもならなかった。
「ははははは、抵抗しても無駄だ！
ここには誰も来ねぇし、お前らの家に帰すつもりもない！
せいぜい商売品として俺の役に立て！」
「い、嫌だ！
助けて、誰か、助けて…！」
子供の一人が蹲り泣きながら助けを求める。
その時だった。
「動くな!!」
「あ？」

そんな言葉と共に銃口を向けられる音が聞こえ、男は入り口に目を向ける。
そこには、三人の男女が変わった形の銃を向けていた。
一人は白髪で長い髪の青年、一人は肩口で切り揃えた緑の髪の小柄な少女、一人は傍らに小さな鳥のような生き物を連れたピンク髪の三つ編みの少女（？）だった。
「誰だてめぇら、その恰好は管理局の人間じゃねぇな？」
「今すぐ子供たちを解放しろ！」
「はっ、嫌だね。
どうしても返してほしけりゃ俺に勝ってからにするんだな。
もっとも…」
そう言うと男の体は一瞬だけ透明になった。
その後すぐに魔法使いのような姿になり、その手には両刃に特殊な形をした武器、ショテルが握られていた。
「てめぇらはここで殺されるんだからな！」
「…そうかよ。
だったら」
その言葉と共に青年は制服の上着の前を開き、男を睨みつける。
その目は先程までの優しい目ではなく、獣のような好戦的な目つきだった。

「そんな口の利き方をするてめぇをぶっ倒してやるよ！
…おい二人とも、行くぜ？」
「はい！」
「わかったよ！」
三人は銃を片手に、懐から引き金の付き、赤、緑、ピンクとそれぞれ特徴が異なる車型のアイテムを取り出して構える。
鳥のような生き物はそれがわかったように三人から離れる。
【1号】【2号】【3号】
その音声と共に、各自が持つアイテムを銃に装填すると共に、銃の向きを変えた。
【【【パトライズ！】】】
「「「警察チェンジ！」」」
三人が言葉を合わせると同時に銃と一体化している車にある引き金を引く。
【【【警察チェンジ!!パトレンジャー!!】】】
その瞬間、『S』の字が刻まれた盾が出現し、警察手帳のように展開して三人の体を覆うように降りる。
各々で赤、緑、ピンクのスーツが体を覆い、胸元にはネクタイのような模様が出現し、両肩には肩パッドが装着され、そして最後に警察帽型のバイザーが付いたマスクが頭部

全体を覆うように装着されて変身が完了する。
「パトレン１号！」
「パトレン２号！」
「パトレン３号！」
「「警察戦隊　パトレンジャー!!」」
三人は同時に変身を完了を告げるように、自分達の名前、パトレンジャーを名乗る。

「時空管理局特命係の権限に置いて、実力を行使するぜ！」
「…時空管理局特命係？
しかもパトレンジャーだと？
はっ、だったらてめぇらをぶちのめしてやるぜ!!」
男はそう言ってショテルを構えて走り出す。
三人は一斉に銃を構えて男に向かって発砲する。
男は飛んで来る弾丸をショテルで弾いていく。
それを見た１号と３号は拡声器のようなアイテムを取り出して、上部の黒いパーツを伸ばす。
すると、そこから警棒のように変形させると共に、男へと接近する。

「「はああぁ」」
「甘いっ!!」
そう言い、ショテルを使い、二人の攻撃を防ぐが同時に二人の後ろから来た緑色の弾丸が男を襲う。
「何が?」
疑問に思い、見つめると、その後ろでは2号がその手に持った銃を構えていた。
「なるほど、そういう事か!!」
先程までの行動に理解すると共に、男は再び襲い掛かる。
「おらぁ!!」
「てりゃあ!!」
「えぇい!!」
1号の力強い、3号の素早い攻撃、2号の正確な射撃は着実に男を追い詰める。
1号の攻撃が男のショテルを弾き、3号はその隙に素早く何度も攻撃を仕掛け、2号は二人に攻撃が当たらないように銃で撃ち抜いていく。
「このっ、調子に乗ってんじゃねぇ!!」
男は後ろに跳び、すぐに周りの風景に溶け込むように歪み消えた。
「なっ!?」

「消えた…！」
「一体どこに…！」
　三人は警戒していた、その瞬間だった。
「っ!?」
　何か音が聞こえたのか、１号は警棒を構えると、見えない何かに弾かれたような衝撃に襲われ怯む。
「えっ、今のは！」
「まさか、姿を…！」
「…なるほどな、これで子供たちを誘拐してたって訳だな」
『おらぁ！
　どこ見てんだよ!?』
「…！」
　３号は声をした方向を向くと、一瞬だけ刃先が見えて、警棒で防いだところを後ろに飛んで受け身を取る。
「あの野郎、消えたと思ったら透明になってたのか！」
「けど、流石に音が聞こえる分、攻撃は防げます！
　でも…」

「音でわかるとはいえ、こっちは防ぐのが精一杯だよ。
あの転生者の位置さえ分かれば…」
「それなら、ヒポグリフ！」
3号は先ほどの小さな鳥のような生き物、ヒポグリフを呼ぶ。
ヒポグリフが飛んできて、翼をはためかせて風を起こす。
風が吹き上がり、地面の埃が舞い周囲に広がる。
「な、なんだこれは!?」
男の慌てふためく声が聞こえ振り向くと、一ヶ所だけ人型の空白が慌てているのが見えた。
「そこですね！」
2号はその空白に向けて撃つと、その空白が色付き、男が姿を現して吹っ飛ぶ。
「もう寄せ！
お前にもう勝ち目はねぇ！」
「はっ、バカめ！
俺にはガキどもが…!?」
男は制止を振り切り、子供たちを人質にしようとするがすでに子供たちがいないことに気付く。

「ガキどもが!?
　どこに！」
「申し訳ありませんが、子供たちなら、すでにこちらで保護してますよ？」
　振り向くとメガネを掛けた壮年の紳士のような男と、ジャケットを羽織った男が立っていて、子供たちは手の拘束を解かれて、二人の後ろに隠れている。
「くっ、てめぇ！」
「バンくん、かこさん、アストルフォくん、後は彼を確保してください」
「あぁ、任せろ右京のおっさん！」
「わかりました！」
「任せてください！」
　三人は銃身を回転してその状態でアイテムの引き金を引く。
『ｂｅｎｅｆｉｔ　ｓｅａｌｉｎｇ』
　音声と共に元の状態に戻して、三人は狙いを定めて、男に目掛けて撃ち込んだ。
「ぐっ、がぁあああああああ!!」
　撃ち込まれた男は氷付けにされて、完全に制止しする。
　すると、男の体から一つの光が出現し、それが1号のアイテムに吸い込まれた。
『ａｒｒｅｓｔ　ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ』

「…任務完了！」
その一言と共に戦いに終わりを告げる。
そこから、事件を終えると共に駆け付けた管理局と共に事後処理が行われた。
男がこれまで行ってきた犯罪についてや、誘拐された子供達の情報など数々が判明していった。
それにより、これまで謎だった数々の誘拐事件も無事に解決へと近づいていった。
「三人とも、お疲れ様です」
「子供たちは俺たちが送っていくし、あとのことは俺たちに任せてよ」
「わかりました。
右京さんも亀山さんも気を付けてください」
三人は仕事が終わった後、右京と呼ばれた男と亀山と呼ばれた男と別れて、帰路につくことにした。
「ねぇバン、この後バンの店でご飯食べても良い？」
「私も、流石にお腹がすいてきましたよ」
ピンク髪の少女（？）アストルフォと緑の髪の少女かこは、白髪の青年バンにそう言う。
「おう、良いぜ！

そうと決まれば早速親父とお袋に連絡しなきゃな！」
バンはニカッと笑って言うと、携帯を取り出した。
「あの！」
電話を掛ける直前、先ほどの子供たちたちの一人がバンたちに駆け寄ってきた。
三人は何だろうと子供を見ると、子供は力一杯勇気を振り絞って頭を下げながら叫ぶ。
「た、助けてくれて、ありがとうお兄ちゃんたち！」
「…どういたしましてだな♪
さ、おじさんたちが待ってるから、早く行ってやれよ♪」
「うん！」
バンは頭を撫でてそう言うと子供たちは元気一杯に返事して、すぐに右京たちの元へと走っていく。
しかし、子供は途中でバンたちに振り向く。
「…？」
「ねぇ、お兄ちゃんたちって何者なの？」
「何者か？
そうだな…」

バンは笑みを浮かべながら、高らかに言う。

「この街の平和を守る、正義のヒーローだ！」

プロフィール１：警察は犯人の無力化を図る

時空管理局特命係、それは文字通り上層部から特別な命令があれば何でもする部署で、元々管理局本部に置かれていたが、現在はある事情で　次元空間航行船アースラに部屋を構えている。

構成されてるメンバーだが全員で五人、その内三人は特命係がアースラに移った時に、そのとある事情でスカウトされた民間人や職員である。

基本的に三人とも各々の生活や仕事を送っているが、特命係からの呼び出しや事件の発生した際に出向することになる。

それで今、その三人は今回の事件を追うために、特命係から呼び出されて現場に向かっていた。

その三人というのが、転生者を取り締まるために設立された警察戦隊パトレンジャーである。

「今日まだ仕込みできてねぇんだけどな…」

「仕方ないですよ、この次元世界で殺人事件があったんですから」

「ちぇー、せっかくヒポグリフに色んな服を着させようと思ったのにさ」

少し不満気に文句垂れてる白髪の青年は湖光バン、普段はアースラで両親と共に、店を開いてコックとして切り盛りしている。
バンの隣で宥める緑の髪の小柄な少女は夏ノ森かこ、普段は時空管理局本局の無限書庫で両親と共に司書として働いている。
そして、そんな二人の隣で動物用の小さな服を取り出してはがっくりしてるピンク髪の三つ編みの少年はアストルフォ・ローランと言い、見た目は華奢でボーイッシュな少女に見えるがれっきとした少年であり、いわば男の娘であり、普段は学生をしていて親が大富豪で執事が一人ついてる状態。
また、アストルフォのそばを飛んでいる小さな鳥のような生き物はヒポグリフ、アストルフォの使い魔であり家族でりパートナーでもあり、何かとアストルフォの面倒を見ている。
「…それにしても、右京さんたちも、この次元世界でとんでもねぇ事件の話持ち込んできたもんだぜ」
バンは懐から資料が入ってる端末を取り出す。
その資料によればこの次元世界の街の狭い通路の行き止まりの壁に人の形をした血痕がこびりついていて、辺りには被害者の物と思われる肉片や臓器がバラバラの状態で発見されて、管理局職員たちが全て回収して調べた結果、全てが人体を構成する全てが

集まっていた。
簡単に言ってしまえば、遺体の損傷はミンチよりもひどい状態だった
それに、駆けつけた職員が痕跡を探知した際に、転生者の反応があったことから、バンたちパトレンジャーに依頼が来たのだ。
血痕の量や規模などを見るからに致死量で、何者かの手によって、被害者の体は破壊されたということが推測された。
ちなみに荷物だけは無事だったが、金品らしきものが抜き取られてる様子。
また、近くの防犯カメラとＤＮＡ鑑定の結果、被害者はこの街に住む女性であったことが判明し、殺害に持ち込んだらしき犯人を特定した。
その犯人は現在も捕まっておらず、この女性と同じようなやり方で殺人や銀行と思われる建物を破壊して、金品を奪ってる模様。
「流石に相手がどんな能力を持ってるのかってのがわからねぇのが、きついよなぁ」
「でも、右京さんたちもここまで調べてくれて特定してくれてるんだから、後は探すだけだよね？」
「それで犯人も大人しく投降してくれれば……！
バンさん、アストルフォちゃん、あれを！」
何かを見つけたのか、会話を中断して、かこは指をさす。

「おいおい、もしかしてあれか!?」
バンは驚きの言葉を口にした。
情報の男は確かにいたが、その男は片手を銀行の壁につけた途端、壁が崩れるように破壊されて穴が開き、中へと入っていった。
「今のって!」
「うん、間違いないよ!
早く行こう!!」
「あぁ!」
バンたちは男の後を追って穴の中に入っていった。
中は行く途中でも何度も破壊したのか、いくつもの壁に穴が空いている。
そして行き着いた先で銀行のロビーにたどり着き、そこで男が銀行職員にその手を伸ばそうとしている。
「動くな!!」
「…?
何だてめぇらは!」
バンたちはＶＳチェンジャーを構えて制止すると、男は苛ただしげに三人を睨みつける。

「今すぐその手を止めて投降しろ！」
「うるせぇんだよこのゴミ共が！」
　男は右手を構えてバンたちに向かって走ってくる。
「…！」
　バンたちは男の攻撃が当たらないように避けると、三人が先ほどいた場所の壁が男の右手に触れただけで崩れて崩壊した。
「あいつの手、まさか特典か!?」
「まさか、その力で人を…！」
「情報で聞いてた遺体はミンチよりもひでぇって聞いてけど、あんなのに触れられたらそれどころじゃねぇ！」
「ねぇ、君が路地裏の女の人をそれで殺したの!?」
「あぁ!?」
　アストルフォの質問に苛立ちながら睨む。
「…あぁ、あの女のことか。
　せっかく金目的で付き合ってやったのにこれ以上金払えないってほざいてたんでぶち殺してやったんだよ！
　だからこうして金のある銀行とか狙って持ち込んだ金で、パチンコだとかギャンブル

に行こうって算段だ！」
「あなたは、そんな理由で彼女を!?
あなたと彼女の間にどんな関係かはわかりませんが、それでも躊躇いはなかったんですか！」
かこは男の動機に驚きを隠せないまま聞いた。
「あるかよんなもん！
金さえあれば、あんなブスがどうなろうが知ったことじゃねぇんだよ！」
「…つまり、お前がその女性を、それから他の人も殺して、ここも含む銀行を破壊してることを認めるんだな？」
バンはどこか落ち着きながらも怒りの籠った目で男に確認を取る。
「あーそうだよ！
そんなわけで、さっさと死ねや!!」
男はそう言って右手を構えて走ってくる。
その瞬間、バンはその手を掴み背負い投げして壁に激突させる。
「がはっ!?」
「あーそうかそうか、そう言うことかよ♪
そんならよぉ…」

　着ていた制服の前を開いて、一束に結んでいた髪を解いてボサボサになり、その目は先ほどの優しい目から打って変わり、獣のような好戦的な目つきに変わった。
「これからてめぇをぶちのめしても構わねぇんだなぁ！
　行くぞ!!」
「はい！」
「うん！」
　そう言うと、バンたちは太腿に懸架されてる銃、ＶＳチェンジャーを取り出して、さらに懐から車型のアイテム、トリガーマシンを取り出してセットする。
　アストルフォのそばを飛んでいたヒポグリフも、それがわかってるのか、その場から離れた。
【１号！】【２号！】【３号！】
【パトライズ！】
【「警察チェンジ!!」】
【【警察チェンジ!!パトレンジャー!!】】
「パトレン１号！」
「パトレン２号！」
「パトレン３号！」

「「警察戦隊　パトレンジャー!!」」
「時空管理局特命係の権限において、実力を行使する！」
「時空管理局？
はっ、てことはてめぇらをぶっ殺せば問題なく金を奪えるってもんだ!!」
男は手元にあった柱に叩く形で触ると凄まじい速度で破片が飛んできた。
その光景に銀行職員や客は怯えるが、どこからか二人の男が入ってきた。
一人は眼鏡をかけた紳士、一人はフライトジャケットを羽織った男。
「失礼、時空管理局の者です」
「ここは危ないから、早く逃げて!!」
二人は出口を確保しつつ、皆を避難させる。
「うおっ!?」
二人の男が避難させてる間。変身した1号たちは破片を避けるように散開し、1号と3号が拡声器型のアイテム、パトメガボーを展開して左右から接近し、2号は正面から二人に当たらないように男に向かって銃撃を開始する。
「えぇい!!」
「おらぁ!!」
「てりゃあ!!」

「はっ、それがどうしたぁ!!」
　男は手を翳すとかこの銃弾が着弾した瞬間に消し飛び、さらにはもう片方の手を床につけて体を支えて両足を浮かして1号と3号に蹴りつける。
「ぐっ！」
「あぅ！」
　二人は咄嗟にパトメガボーで受け止めて後ろに下がったが、男は1号に向かって接近し、右手で頭を掴もうとするが、1号は避けてパトメガボーでその腕を殴る。
「くっ！」
「…！」
　男は若干怯み、腕にかかった衝撃でなのか、右腕の袖が破けて、幾何学的な魔方陣らしき模様が彫られた右腕のの素肌が露になる。
　しかもよく見るとその模様が光ってるように見えた。
「それがてめぇの特典の正体か！」
「あぁそうだ、だがこいつはただもんじゃねぇぜ！
　こいつはハガレンのスカーってやつが使ってた破壊の右腕だ！」
「ハガレンだとかスカーがどうとかよくわかんねぇけど、とにかくやべぇことに変わりねぇじゃねぇか！」

「この手でぶっ殺すって言ってんだろうがよぉ!!」
そう言うと男は床に手をつけて、そのまま引き剥がすように後ろに動かすと、床が残骸に変わり、2号と3号はその砂煙に気を取られて動けないでいる。
「かこ、アストルフォ!」
「さて、まずはてめえからだ!」
「ちいっ!」
男は1号に目掛けて殴りかかり、1号はそれを必死で防いではかわしている。
「へっ、どうした!?
その程度…っ!?」
男はいきなり床に膝を付けて息が荒くなる。
「はぁはぁっ、なんだこれは!?
力が、入らねぇ…!」
「そうりゃあそうだろがよぉ♪」
「っ!?」
男は1号に目を向けると、1号は手を翳しているのが見えた。
「いやぁ、効果が出てきてくれて助かったぜ。
お前と戦う時から使ってたが、思ったよりも早くて助かったぜ。

…俺って自分の魔法の経験少ねぇから、お前の身体能力を吸収するのに時間が掛かっちまってよ。

けど、おかげでお前の動きを制限できて良かったぜ！」

「くっ、てめぇ!!」

男が怒りに身を任せて動きが鈍くなった体を起こそうとした時、風が巻き起こり、振り返ると2号と3号がＶＳチェンジャーを構えていた。

「…形勢逆転だな、もう諦めて投降しろ」

「こ、こんなところで俺が捕まってたまるかぁあああ!!!」

男は床に手を付けて分解して、砂煙に紛れて逃げようとする。

しかし、男の視界に、砂煙の中で、拳が飛んでくるのが見えた。

「え？」

「逃げるなら、お前から吸い取った分のパンチを喰らっていけ」

その言葉を最後に、男は意識を失った。

男が気を失った後、1号たちは男の特典を封印、及び逮捕して、管理局に身柄を預けて事後処理が行われた。
今回の事件で男が奪った金品は全て、襲われた銀行や殺害された被害者の遺族に返却された。
また、最初の被害者だった女性については、遺族の話によるとどうしても放っておけなかったからと女性は元々ホームレスだった男と付き合って養っていたらしい。
それ故、亡くなる直前、肉体的に精神的に限界が来て、不治の病を患ってしまった女性自身は男をこれ以上養えないことに悲しみながら、別れを告げるために最後の金を渡そうとしていたそうだ。
「…いくら献身的に養おうとも、人間的に問題のあった彼の前では、何もかもが無駄だった。
あまりにも哀れで、あまりにも悲しい事件でしたねぇ」
後日、アースラの特命係の部屋で新聞を読みながら、眼鏡をかけた紳士のような壮年の男、杉下右京は紅茶を口に含む。
「いやぁそれでもこの男も、ろくな奴じゃなかったっすよ。
バンくんたちが捕まえて、こっちで事情徴収しても、全部自己中なことばっか言ってましたし！」

その隣で気難しそうにしてる刈り上げた短髪にフライトジャケットがトレードマークの男性、亀山薫は今回の男に関する資料を見て呆れている。

この二人は時空管理局特命係の職員であり、バンたちの上司に当たっており、戦闘の際彼らのサポートをするために密かに避難したりしている。

「確かにそうでしたねぇ。

後のことは、本局の方でどう処罰が下るのかで決まりますので、僕たちが気にしても仕方がありません。

…さて、それはそうと、どのくらいで地球に着くのでしょうか」

そう言うと、右京は新聞を置いて、ある資料を取り出して目を通す。

バンたちパトレンジャー、及び彼らが使うＶＳチェンジャーとトリガーマシンに関する資料を。

サイドプロフィール：バン

パトレンジャーが結成される前、アースラの一角に食堂の近くにある店があった。
その店の名前は湖光食堂。
湖光食堂は元々ミッドチルダにあった飲食店として栄えていたが、来客していた管理局の職員たちから絶賛の評判であったことや当時の管理局の食事事情などからスカウトされて、一年前からこうしてアースラに店を構えることになったのだ。
それからというもの、アースラではさらに食事が進み、元々あった食堂のシェフから一時期ライバル心を抱かれたりしたがそれが向上心を上げるきっかけにもなって、アースラで働く職員たちからも食事が楽しみだと言われてるほどだ。
そして今日も一人の青年は店の前で客の呼び込みを行っている。
彼の名前は湖光バン、１８歳。
湖光食堂で店主を務める両親の一人息子でコックも務めている。
「へい、いらっしゃい!!
うちの店はどうですかぁ!!
様々な料理が楽しめますよぁ!!」

ぞろぞろとやって来る客、いやアースラの乗組員及び管理局職員たち。
客が店に入っていくと、一人の女性がせっせと接客及び注文を聞いて、その注文を聞いた男がフライパンを振るう。
「はぁい、おひとり様ですかぁ？
あら、こちらのご注文でよろしいですねぇ？
あなたぁ、3番テーブルナポリタン一人前入るわよぁ！」
「おう、じゃあそこにメニュー書いててくれ！
あと5番テーブルにこのピラフ持って行ってくれ」
間延びした口調で客から注文を聞いている白髪の女性は湖光みたま、バンの母親である。
そして、力のこもった声で返事をしながら料理の品を作り上げるオレンジの髪にバンダナを巻いた男は湖光ジバゴ、バンの父親である。
「バン、客の引き入れが終わったらこっち手伝ってくれ！」
「わぁーてるよ♪」
バンはジバゴに言われて店の中に入って注文聞いたり厨房で料理を作る。
「お袋、あっちのテーブルにこのラーメン頼むわ！
…ふぅ…っ!?」

みたまに料理を渡して一息ついた途端、バンの体に異変が起こった。
バンは苦しさのあまり胸を押さえて膝をついてしまう。
「うっ、がぁっ!?」
「おい、どうしたバン!」
ただ事ではないと思ったのか、ジバゴは料理を中断してバンの背中を擦る。
「あなた、バンがどうかしたの!?」
接客から慌てて戻ってきたみたまが厨房を覗き込む。
「バンっ、しっかりしろ!」
「返事してっ、バン!」
二人から必死の声掛けをされるがバンはそれどころではなかった。
猛烈に汗をかき、胸が締め付けられるような痛みが走り、視界もぼやけてきた。
そしてそのまま、バンは意識を失った。

「…うぅっ、ここは」
バンは目を覚ますと、そこは医務室だった。
「俺、何でここに」
「気が付いたか？」
「…！」
声のした方向に顔を向けると、黒髪の少年がいた。
アースラの執務官を務める、クロノ・ハラオウンだった。
「クロノ…」
「店のことなら気にするな。
ジバゴたちが君をここまで運んだ後、店仕舞いの準備をしている。
それよりもさっき調べてみた所、体には特に異常がなかったが、特にリンカーコアが…」
「俺のリンカーコアが何かあったのか？」
クロノはデータを展開して、それをバンに見せる。
「君が倒れた時、君のリンカーコアが何かに反応するように共鳴した形跡がある。
だがそれは、本局でも同じ反応が見られた」
「同じ反応？」

「それについて、本局から連絡があって今職員がここに来てるんだ。
…入ってください」
「失礼」
クロノがドアに向かって言うと、一人の男が入ってきた。
その男は眼鏡をかけて、オールバックの黒髪といった特徴の紳士風の壮年の男だった。
「彼が、本局から訪問してきた、特命係の杉下だ」
「どうも、杉下右京です」
「あ、どうも。
湖光バンです、ここでコックやってます」
「では、僕はこれで失礼する。
杉下係長、後のことはお願いします」
右京がぺこりと頭を下げて、クロノはその場を後にする。
「…さて、では少し話をしましょうかねぇ」
そう言うと右京は医務室の椅子に座り込み、バンの視線に合わせるように真っ直ぐと見つめる。
「まず最初に、君は先ほど、気を失ったそうですねぇ」

「はい、何でも俺のリンカーコアと何かが共鳴した影響だとか。
…右京さんは、何か知ってるんですか？」
「知ってると言うか、心当たりとでも言いましょうかねぇ。
恐らくは、これに反応したのではないかと」
右京はそう言って懐から変わった形の銃とトリガーの付いた車型のアイテムだった。
「…何ですか、これ？」
「これはＶＳチェンジャーとトリガーマシンです。
対転生者用の、ロストロギアとでも言いましょうかねぇ？」
「対転生者用？
しかもロストロギア!?」
対転生者用という言葉に疑問を抱き、ロストロギアという言葉に驚くバン。
前者はともかくとして、ロストロギアという物は、コックとはいえアースラの職員として働いているバンにもよくわかる。
特に二年前に「闇の書」というロストロギアに関する事件が新しい。
今となってはその「闇の書」は完全に消えて、そのマスターは今は嘱託魔道騎士として管理局で働いているという噂を耳にする。
「えーと、それって、前に聞いたことのある、『闇の書』みたいに主を蝕むとか…」

「ご安心を、これにはそう言う機能はありません。
あくまで転生者に対抗するための力ですから」
そんな機能はないと聞いてほっと安心するバンだが、先ほどから転生者という言葉に妙に引っ掛かりがある。
「あの、気になってるんですけど、その転生者ってなんなんですか？
どっかの次元世界から来た支配者とかですか？」
「そうですねぇ…」
その質問は予測していたと言わんばかりに右京は説明する。
転生者とは、いわば死んだ人間が神から特典と呼ばれる力を手に様々世界を行き来する者たちのことだそうだ。
中にはバンたちがいる世界の知識を知ってる者もいればこの世界の未来で何が起こるのかもわかる者もいるそうだ。
また、中には知識としてだが特定の人物の性格や過去なども知ってるとかなんとか。
さらに特典とやらも、その様々な世界という物に由来する物が多い。
「…けど、いくらそうは言っても相手は人間なんですよね？
対抗ってことは、まるでそいつらと戦うみたいですけど」
「確かに、彼らも元を辿れば僕たちと同じ人間です。

しかし、人間だからこそ、過ちを犯す者たちも出てくるのです」
「まぁ、その辺りは人ですからね」
人間は状況次第では善悪に分かれるのはわかる、実際世の中には境遇故に強盗を働く者もいるし、正当防衛のつもりが殺人を犯す者もいるのだから。
転生者という存在が元が人間だというのならそう考えるのは当然だった。
「けど、それだったら別に俺じゃなくても魔導士に…」
「それがどうも、難しいみたいなんですよねぇ。
現段階では魔導師ですら決定的な有効打にならないんですよねぇ。
特に、転生者の確保に成功しても、その後搬送途中や拘置所で特典が暴走して被害を拡大させてしまうケースもあります」
「けど、それをどうにかできる力を、このＶＳチェンジャーとトリガーマシンにはあるってこと、ですか」
「はい、さらにはそれを扱うのは、それらに選ばれた者たちだけ。
その内の一人が、君だったんですよ」
「えぇ…」
バンは嫌そうな顔をしながらＶＳチェンジャーとトリガーマシンを見る。
「…いやいや、ちょっと待ってください。

俺、そもそもコックの仕事あるんですけど！」
「それは承知しております。
ですので、今の仕事と兼業という形で、基本的に僕たちで調査をいたしますので、何かあればこちらから連絡しようかと思うのですよ」
「…」
バンは少し考える。
流石に今の仕事を引き抜かれるのはヤバイと思ったが、兼業として今の仕事を続けられるのなら、別に悪い話じゃない。
しかし、バンは子供の頃喧嘩こそはすれど戦闘経験はほとんどない。
それ故、仮に駆り出されたとしても戦えるかどうかもわからない。
そう考えて、バンはそれらを右京の顔を見る。
「すみません、少し時間をくれませんか？
俺、ほとんど戦ったこともないですから、あまり自信が…」
「そうですか、では今回のところはこれで失礼します」
一礼してから右京はその場を去った。
「はぁ…」
一息入れてベッドに横たわるバン、正直あのロストロギアに選ばれたとなったら、こ

の先不安しかなかった。
ちゃんと今の仕事と兼業してそんなことが自分にできるかどうか。
そんな時、アースラは激しい揺れが起こった。
「うおっ!?
な、何だ、次元震か!?」
『緊急事態発生、緊急事態発生！
アースラの食堂近くに侵入者が出現！
魔導士は速やかにこれの対応を、そして非戦闘員は直ちにシェルターへ避難してください！
繰り返します……！』
「食堂近く……！
ってことはまさか！」
バンは勢いよく起き上がり食堂に繋がる通路へと向かった。
非戦闘員たちが急いでシェルターへと向かう中バンは突っ走る。
「バンっ！」
「お袋！
親父はどうしたんだ!?」

「それが、私に先に行くよう言って、まだお店に…」
「あのバカ親父！
…とにかく俺が親父を連れてくるから、お袋は先にシェルターに向かってくれ！」
「えぇ、バンも、気を付けてね」
バンはみたまと分かれてすぐに湖光食堂に向かった。
「おいバカ親父、今は緊急事態なんだ、早くシェルターにい、どう…」
湖光食堂の前に着いた途端、バンの目に衝撃的な光景が映った。
バンが来た通路とは別の通路が瓦礫のせいで塞がり、食堂のテーブルや椅子、食堂内も壊滅的だった。
それに店の中もかなり荒れていて、悲惨な状態だった。
だが、それよりももっと衝撃的な光景がある。
その奥で、この惨状を引き起こしたと思われる男が、ボロボロのジバゴの首を掴んで持ち上げているのだ。
「がふっ…！」
「親父っ!!
てめぇ、今すぐ親父を放せぇ!!!」
バンは怒りのままに男に殴りかかる。

「おらぁ!!」
「ふっ」
　男はほくそ笑むと拳を片手で軽々と受け止める。
「なっ!?」
「無駄だ。
　お前程度じゃ俺には勝てない。
　なにせ俺には…」
　そう言うと男の姿が変わり、全身に突起物の付いた怪物へと変わった。
「この超獣ベロクロンの力があるからな!」
「に、げろっ、バン…!??」
「ぐはぁあああああ!!????」
　ジバゴが血を吐きながら言うも遅く、全身の突起物がミサイルになって発射されてバンに直撃する。
「がはっ!!」
　所々服が焼け焦げ軽い火傷を負った状態で何度もバウンドして叩きのめされる。
　傷つきボロボロの体を起こしてバンは男が何かをしてるのが見えた。
「ほぉ、これがアースラの食堂か、イメージは違うが。

それにこの料理は…」
「てめぇ、店の料理に触ってんじゃねぇ！」
ジバゴを床に放り捨てて、無事だった店の料理を手に取る。
「これは、地球の料理、だな？」
その言葉と共に、男は床にそれを叩き付けて食器を割り、盛られていた料理をぶちまけた。
「…！」
「おっと、手が滑っちまった」
男はその足でぶちまけられた料理を踏みにじる。
その行動が、バンの逆鱗に触れた。
「…てめぇ、うちの料理に何をしてれてんだ、あぁん!?」
「…は？」
その体を引き摺りながらバンは男に向かって近づく。
「食う目的もねぇのに、人様の料理を粗末にしておいて、ただで帰れるなんて思ってんじゃねぇぞ！
俺はお残しは仕方ねぇからまぁ許すが、故意にぶちまけるようなやつとか訳もなく無銭飲食働くやつは許さねぇ!!」

「…知るか、失せろ！」
　男は全身のミサイルでバンにとどめを刺そうとする。
「バンくん！」
「…！」
　男のミサイルがバンに当たる直前、右京が駆けつけて庇う。
「右京さん…？」
　バンは突然右京に庇われたせいか、頭は冷えて元の口調に戻る。
「大丈夫ですか…！」
「なんとか…。
　それよりも右京さん、あいつって…」
「転生者ですよ。
　何が目的でアースラに襲撃を仕掛けているのかはわかりませんが」
「目的とかそれ以前に、あいつをこのままにすると食堂も店もひとたまりもないですよ！
　それに瓦礫で魔導師たちが来れねぇし」
「確かに、このままではいきませんねぇ。
　しかし、これは君が決めることですが、やり方次第では、この状況を打破できる手段

はあります」
「それって、まさか…」
「ええ」
右京は懐からＶＳチェンジャーとトリガーマシンを取り出す。
「君が、これを使って戦うんです。
しかし、君は魔導師ではないので、戦闘経験もないに等しい。
君は、どうしたいですか？」
「…」
バンはＶＳチェンジャーとトリガーマシンを見て考える。
確かに、自身に戦闘経験はない。
一応手元にデバイスは持っているが、ほとんど即席の物干し竿に使ってるような状態で戦闘目的で使ったことがない。
しかし、それがどうしたというのだ？
今は瓦礫のせいで魔導師たちが来るのが遅れているし、ここにいた皆は非戦闘員だ。
この今の状況を、どうにかできる可能性があるのは誰だ？
自分の父親のジバゴは重傷で気を失ってる状態だ。
右京に任せても、恐らくは自分とジバゴを連れて逃げることがやっとだろう。

なら、自分はどうだ？
立場的に非戦闘員だが、右京は自分のリンカーコアがＶＳチェンジャーとトリガーマシンに共鳴、反応したと言った。
そう考えたら、自分だけが、この状況を打破できるのでは？
そんな考えにたどり着いた途端、バンの中で闘争心が沸き上がってきた。
「おいっ、おっさん!!」
「…何ですか」
「あんた、言ってたよな！
それさえあれば、転生者に対抗できるって！
だったら、それがあれば、あいつをどうにかできるんだよな!?」
「ええ、可能ですよ」
バンの口調が変わっていたが、右京はバンにＶＳチェンジャーとトリガーマシンを渡した。
その瞬間、バンの中でこれの使い方が流れ込んでくる。
情報を読み込んだ後、バンは獣のような好戦的な目付きで男を睨みつけて、ＶＳチェンジャーにトリガーマシンをセットする。
【１号！

パトライズ！】
「何をするか知らんが、くらえ!!」
「警察チェンジ！」
男がミサイルを発射する。
だが、それよりも早く、バンは引き金を引く。
【警察チェンジ!!】
銃口から『S』の字が彫られた盾が出現し、ミサイルを全て防御する。
そして防ぎ終わった後に、その盾が警察手帳のように開いてバンの身を包み、変身が完了する。
【パトレンジャー!!】
「おぉ、姿が変わった…！」
「姿が変わったからってどうしたぁ!!」
「うおっ!!」
そう言うと男は手からビームを出し、バンはそれを避ける。
「これは、動きやすいな♪」
「バンくん、関心しているところをすみませんが、僕は奥にいる彼を助けにいきます。
その間、君は転生者を頼みます」

「わかったぜ！」
「クソジジイが、行かせるか…!?」
　男が右京に攻撃しようとした途端、足元に銃弾が撃ち込まれて怯む。
「お前の相手は、俺だぜぇ!!」
「ちいっ！」
　バンはＶＳチェンジャーで銃撃しながら接近する。
「この距離なら、ミサイルもビームも使えねぇな！
　来いっ、セットアップ！」
『ｒｏｄ　ｆｏｒｍ』
　バンはデバイスを展開して両端が杭のように尖った長い棒を取り出して懐に入る。
「いつまでそこに突っ立ってんじゃねぇ！
　親父とおっさん巻き込まれたらどうしてくれんだぁ!!」
「ぐはぁっ!!」
　バンは思い切りその棒で男をぶん殴り、遠く離れた壁に激突させる。
　その隙に右京はジバゴを安全な場所へと連れていく‼?
「この、カス野郎がぁ!!」
『ｍｕｌｔｉ　ｆｒｏｍ』

怒り狂った男が全身からミサイルを発射するが、バンはデバイスの棒を多節棍に変形させて振り回す。
大量のミサイルはバンに当たる前に多節棍で破壊される。
「ちっ、こいつ、良い気になりやがって…!?
な、何だ、力が!?」
急に力が入らなくなって膝を着いた男は戸惑いを覚える。
「変身してお前に近付いた時から力を吸いとらせて貰ったぜ！
これで、終わりだ!!」
そう言うとバンはＶＳチェンジャーを回転させてトリガーマシンの引き金を引く。
『ｂｅｎｅｆｉｔ　ｓｅａｌｉｎｇ』
もう一度回転させて元の状態に戻し、狙いを定めて発射する。
男に着弾した瞬間に、男は元の姿に戻り氷付けにされる。
それと同時に男の中から光が出現し、ＶＳチェンジャーに吸い込まれる形で消えた。
『ａｒｒｅｓｔ　ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ』
「任務、完了…。
はぁ…！」
「バンくん、大丈夫ですか？」

「右京さん…、はい何とか…」
　変身解除して倒れそうになったバンを右京が支える。
「…それにしても、この力何なんですかね。
　何かあいつ氷付けになりましたし」
「これはＶＳチェンジャーの力、逮捕の力とでも言いましょうか」
「逮捕？」
「ええ、これにより、転生者は完全に無力化された上に特典の封印をしましたし、そう呼ぶべきかと」
「そう言えばａｒｒｅｓｔってこれが言ってましたからね」
　その後、クロノたち魔導師が瓦礫を破壊してようやく来たのだった。
　バンは男の身柄を右京とクロノたちに明け渡して事情聴取している。
　何でもこの男はアースラをハイジャックして本局に特攻仕掛けた上で本局を乗っ取ろうとしたそうだ。
　それからしばらくした時だった。
「右京さん」
「何ですか？」
「俺、未だに転生者がどうとかよくわからないんですけど、兼業しても良いなら、俺この

仕事引き受けようと思います」
「それが、君の答えですね？」
「はい」
「そうですか。
それでしたら、改めて言わせてもらいましょう」
右京は改まった様子で、まるで迎え入れるようにお辞儀する。
「ようこそ、時空管理局特命係へ、湖光バンくん。
僕は、君の入隊を歓迎しましょう」
これが、バンが特命係のパトレンジャーになった瞬間だった。

サイドプロフィール：かこ

これはバンがパトレンジャーになって数日後、アースラが修理のために本局に戻ってきたときの話。

無限書庫、そこは時空管理局本局にある書庫で、様々な世界やロストロギアなどの知識が記された本が収められている。

中は辺り一面に本棚があって本が敷き詰められていて、階段どころか足場がなく無重力状態になっている。

しかし、あまりにも知識が膨大過ぎてほとんどが未整理の状態だった。

だが、２年前の「闇の書事件」をきっかけにユーノ・スクライアを筆頭に様々な職員が導入されたことにより本本格的に書物の整理が行われ、今となっては検索するだけで大抵はすぐに出てくる状態にある。

そんな中で一人の少女は浮いている本を本棚に詰めている。

「えーと、この題名だからこっちで、ジャンルがこれだからあっちで、えーと…」

本棚と本を見比べながら本を敷き詰めている、肩まで切りそろえた緑の髪の小柄な少女は夏ノ森かこ、１３歳。

1年前までミッドチルダの図書館で両親とともに職員として働いていたが、管理局からのスカウトで両親ともども無限書庫の司書として働いている。
彼女の家族は歴史や文書などに詳しく、その影響でかこ本人は本や書類の整理が得意で最近ではあるジャンルでだが本を自分で読む目的で書いている。
「かこ、ちょっといいかな?」
黄緑色の髪をした少年であり、職員としてかこの先輩の当たるユーノ・スクライアがかこに声をかけた。
「ユーノさん?
あの、どうしましたか?」
「君宛に客が来ていて、入り口前で待ってるんだ。
何でも、君が先日倒れたことに心当たりがあるみたいだけど…」
「は、はぁ…」
「あと、それも兼ねてスカウトしてるみたいなんだ。
だから行ってあげなよ」
「スカウト、ですか…。
わかりました、失礼します!」
かこは疑問に思いながらユーノに言われた通り入口に向かうのであった。

「お待たせしました！
　無限書庫司書の夏ノ森かこです！」
「お時間いただきありがとうございます。
　僕は時空管理局特命係の杉下右京です」
「同じく特命係職員兼アースラの湖光食堂のコックの湖光バンです」
　かこは無限書庫を出て、談話室にいた右京たちに挨拶をする。
「あの、それで私に何か用があると聞きましたが…。
　何でも先日私が倒れたことについて心当たりがあるようですが…」
「失礼、実は君たちのリンカーコアがあるロストロギアと共鳴したそうでしてねぇ…」
　右京は懐からＶＳチェンジャーとトリガーマシンを取り出して見せる。
「…これらの反応を頼りに、君を探していたのです。
　それで、君をスカウトするために、ここに来たと言うわけです」
「その、これには転生者という奴らに対抗する力があってだな…」

「転生者という存在については、私も理解はあります。
一応、書庫の本にもその人たちのこと書いてありましたし、魔導師たちからもその手の情報も提供して頂いてるので。
ですが…」
「兼業という形でも構いませんよ？」
「それはありがたいのですが…」
かこはそう言うと、不安そうに顔を伏せる。
「私はデバイスを持ってますが戦ったことはありません。
それに兼業と言いましても、元々戦闘目的のために無限書庫で働いてるわけではないので…!?」
そう言いかけた途端、無限書庫から何か騒ぎが聞こえた。
「…無限書庫から何やら騒ぎが起きてるようですねぇ」
「とにかく行ってきます！」
かこは何か嫌な予感がして急いで向かい、右京とバンもそれについていくように向かった。

『っ!?』

無限書庫にたどり着いたかこたちが見た光景は衝撃的だった。

書庫に漂う本は開いたページは全て白紙で、何人かの司書たちもまるで何かを抜かれたように目を開いてる状態だった。

その中には、かこの両親もいた。

「…っ!?

お父さんっ、お母さんっ!!」

かこの両親と思われる緑の髪の女性と青髪の眼鏡を掛けた男性の下へと飛び呼び掛ける。

「お願いっ、しっかりして！」

「…気を失ってるようですねぇ。

脈もあることから、命に別状はないかと」

「…右京さん、多分あいつじゃないですか？

あの中央で何か文字を吸い寄せてるやつが」

バンに言われた通り書庫の中央を見ると、一体の怪物が手を広げていた。

その見た目は○×や？マークの模様が施され、両肩の脳みたいな装飾にはビスやコー

ドが繋げられたような姿をしていた。
その怪物は両手を広げて、本棚にしまってる本から文字を吸い寄せてるようにも見えた。
怪物の周りに、ユーノたちが警戒しながら戦闘体勢に入っている。
「…あの野郎！」
「…！
来ちゃ駄目だ！
やつに触られたら、知識を奪われるぞ！」
「っ!?」
バンが出向こうとした途端、ユーノがそれに気付いたのか制止をかける。
「どういうことだよ!?」
「さっき、見たんだ！
あいつに触れられた皆から、知識らしきものを奪っていくところを！
もしかしたら、記憶も…」
「そ、そんな…！」
ユーノの言葉にかこは戦慄を覚える。
それを聞いて怪物が口を開いた。

「…ふん、さっきから近づいてこないと思えばそこまで解析していたか」
「失礼、今の話が本当なら、それがあなたの能力ですか？」
「だからどうした？
　俺の特典はアナザークイズであり、その上書物とか碑文のような書き記したものだったら手を翳すだけで知識を奪えるというものだ。
　もちろん、今言ったように人間から知識だけでなく記憶も奪えるがな」
「じゃあ、お父さんもお母さんも…」
「あぁ、そこに漂ってるやつか。
　本から知識を奪おうとしたら邪魔したんでな。
　ま、当然の報いだな」
「そ、そんな…！」
　かこは今にも泣きそうな顔になりながら両親にすがり付く。
　右京はそんなかこを一瞥してからバンに指示を出す。
「…バンくん、このままでは書庫の職員も書物も壊滅してしまいます。
　僕は、避難を行いますので」
「…了解です。
　…しゃあ、やってやろうじゃねぇかこのクソヤロウ!!」

バンは好戦的な目付きになって怒鳴ると、すぐにデバイスを展開する。
『ｍｕｌｔｉ　ｆｒｏｍ』
「なっ!?」
多節棍になったデバイスで怪物の足を縛り付けて、出入口に目掛けて投げつけようとする。
「おいってめぇら!!
壊されたくなかったら開けろ!」
「は、はい!!」
司書たちは急いで出入口を開けると、バンは怪物を放り投げる。
「よーし、確かこの先は誰もいなかったな…。
待てコノヤロー!!」
そう言ってバンは変身して、怪物を追いかける。
一方、右京はその様子を見た後で、かこに目を向ける。
「…」
「かこさん、少しよろしいですか?」
「…何ですか?」
「今は彼一人で転生者を押さえていますが、経験も少ない彼では倒すのは困難でしょう。

それに、もし魔導師たちの救援が来る前に彼が倒れれば、またしてもここに来るかもしれません。

…それで、そんな事態を防ぐためというのもあるのですが、あなたはどうしますか？」

「…」

右京は再びＶＳチェンジャーとトリガーマシンをかこに見せ、かこはそれを見ながら周りを見渡す。

職員に救出される知識を抜かれた司書たち。

本棚からはみ出て開くは、何もかもが抜き取られて何も書かれていない白紙の本。

そして、かこの目の前で横たわる両親。

もし、右京の言ってることが現実になってしまったら？

バンだけでは倒せなかったら？

それでも魔導師の救援が遅れればどうなるのか？

かこもさっきの怪物の力を見ていたのでよくわかる。

ユーノたちは攻撃をしなかったのではない、知識を抜かれてしまう可能性からできなかったから警戒して解析していたのだ。

そう考えただけで、このロストロギアに選ばれた自分も戦うしかないのかと、かこは自分のやることを悟った。

「…私は、戦います。
ここには、様々な世界の知識が詰まってるんです。
その知識を守るのが、私たち司書の役目でもあるんです……！」
「なるほど、ではこれを受け取ってください」
「……！」
かこは受け取った瞬間、頭の中で使い方が流れ込み、それが終わった後でＶＳチェンジャーとトリガーマシンを強く握る。
「…では、行きます。
正直、私がどこまで行けるか、わかりませんが…」
「ええ、もしその時は、僕もサポートは惜しみません」
かこはそのままバンが向かった方向へと移動するのだった。

「ちぃっ、こいつ！」
一方バンは、書庫から怪物を引き離したのは良かったものの苦戦していた。

「どうした、もう終わりか？」
「くっ！」
怪物は先ほど書庫から奪った知識を使っているのか、様々な魔法でバンを翻弄している。
「てめぇ、この力ってまさか…！」
「そうだ、俺は奪った知識を自分の物にする。
つまり俺はその知識を能力として使うことができる。
だからこうやって魔法が使えるんだよ」
「こいつ…！」
「ふっ」
バンがＶＳチェンジャーを構えようとした途端に怪物が手を翳すと、バンの周囲から魔法で作られた鎖が出現し、バンの手足を引っ張る形で縛り付ける。
「しまっ!?」
「さて、さっきはよくも書庫から放り出してくれたな。
おかげで全ての知識を奪えなかったし、さっさと倒して再び奪いにいかないとな」
「くっ、ここまでか…」
「失せろ…!?」

瞬間、バンの後ろから飛んできた銃弾が怪物の足元を撃ち抜き、さらにはバンを縛っていた鎖を砕き、バランスを崩して倒れる。
「一体何が…！」
「誰、だ？」
銃弾が飛んできた方向を見ると、そこにはかこが震える手でＶＳチェンジャーを構えていた。
「お前、それは…！」
「…司書のガキか。
余程知識を奪われたいらしいな」
「その前に、教えて下さい…」
「は？」
「あなたが書庫でしたことは許せません。
本のことも、お父さんとお母さんも含む司書たちにしたことも…！
あなたが転生者だというなら人間でもあるはず。
何でこんなことしたんですか、知識が欲しいなら、私たちで教えることもできたはずなのに！
あなたは、こんなことをして、何とも思わないですか！」

かこは少し怯えながらも、怪物に人としての良心を問うように聞く。
「…そんなの、決まってるだろ。
俺は人間が嫌いなんだ、信用できるわけがない。
人間に嘘つかれるくらいなら、最初から奪って置けば良い。
それにそもそも俺が知識を記憶ごと奪ったのは、いきなりこんな世界に飛ばされたから、俺が生きていくには必要なことでもあったんだ。
それに記憶があればその知識に関する経験も手に入るわけだからな」
怪物は一息入れて拳を握り、かこを睨む。
「知識を求めて何が悪い？
平和に生きたいと思うことが何が悪い？
生きていく方法を知りたいと願うことの何が悪い!?」
「…！」
かこは慟哭にも似た怪物の叫びに怯みかけるも、それでもかこは決して逃げようとしない。
「それでも、どれだけ人間不信でも、どれだけ生きる手段が欲しくても、知識を奪うことも、人から記憶を抜き取るのも、あってはならないんです。
あそこの書庫には、色んな世界の知識が詰まっていて、その知識は守らなければなら

ないんです。
それに、その人には大切な思い出があるんです。
だから、そうやって記憶も、知識も、簡単に奪ってしまうことは、それは絶対にあってはいけないのです…！」
「…何だ、何だお前は？
何だって言うんだ？
何様のつもりだお前はっ!?」
「…私は、かこ、夏ノ森かこ。
無限書庫の司書です。
あなたが奪ったものを取り返すためにここにいます。
だから…」
かこは覚悟を決めた目で、トリガーマシンを取り出して構える。
「あなたが奪った本の知識と、皆さんの記憶を返してもらいます！」
【2号！
パトライズ！】
「警察チェンジ！」
【警察チェンジ!!】

【パトレンジャー!!】
かこはＶＳチェンジャーとトリガーマシンで変身し、バンの隣に立って、手を差し伸べる。
「大丈夫、ですか？」
「あ、あぁ…、ありがとな夏ノ森さん」
「かこ、って言ってください。
それに、あの人の力、奪った知識を使えるみたいですね」
「そうだな、あいつ書庫の知識を使ったのか魔法が使えるんだよ。
それが厄介でな、おかげで俺の魔法を使う暇もねぇ」
「そうですか、ならここは私が押さえます」
「は？」
かこの言葉に思わず呆けるバン、しかしかこは少し怯えながらも栞型のデバイスを取り出す。
「私の魔法で、あの転生者の力を相殺します。
その間に、バンさんは叩いてください」
「…一応聞くけど、相殺なんて、そんなことできるのかよ？」
「やったことはありません、ですが、やれないことではないと思うのです。

…あの人が書庫にあった本と司書たちの知識を使うなら、なおさら」
「…？
わかったぜ、じゃあその間に俺があいつをぶっ飛ばしてやるぜ！」
「何をしても無駄だ！
お前らまとめてその知識を記憶ごと奪ってやる！」
「来ます！」
「おう！」
『ｒｏｄ　ｆｏｒｍ』
『ｇｕｎ　ｆｏｒｍ』
怪物は両手から魔方陣を出し、それを確認したバンはデバイスを長い棒に変形させてまっすぐと走り出す。
その隙にかこは栞型のデバイスを展開し、栞を挟んだ本を出して、さらに栞を取り出して銃に変形させる。
そして本はひとりでにかこのそばを浮遊しページを開く。
「くらえぇ!!」
両手の魔方陣から様々な魔法が飛び出し、バンに向かって飛んでいく。
「やはり、それは書庫にあった本の魔法…。

ならば、リプロダクション!!」
『ｒｅｐｒｏｄｕｃｔｉｏｎ』
かこの意志に応えるように本がページをめくり、怪物が出した魔法と該当する名前と知識が光り、それと連動するように手に持っている栞型の銃も光る。
かこはそれを確認した後、狙いを定めてバンに向かっていく魔法目掛けて撃ち抜き、ぶつかり合うように消滅した。
「なっ!?
ちいっ、こんなのまぐれだ!」
「その魔法も、書庫の本にあった魔法です!」
『ｒｅｐｒｏｄｕｃｔｉｏｎ』
怪物が別の魔法を使おうにも、かこがすぐにそれをぶつけ合わせて消滅させる。
「なぜだ?
何故俺の攻撃が無効化されるんだ!?」
「そんなの簡単です、私が、あなたと同じ魔法で相殺してるからです!」
「何だと?」
「私の魔法は、記録と再現。
一度私を通してデバイスに記録されると私自身が忘れても残り続けます。

そしてその上で私はその魔法を、私自身の魔力を超えない限り再現できます…！
だから、あなたの魔法を相殺して無効化することなんて、やってみればそう難しいことではないんです！」
「くっ、このメスガキ…！」
「おらぁ!!」
怪物がかこに油断してる隙にバンはデバイスで怪物の顔面をフルスイングする感覚で殴り飛ばす。
「ごはぁ!?」
「もう終わりだ、大人しく奪った知識と記憶を返してもらうぜ」
「くっ、まだだ…！」
瞬間、バンの周りから鏃のついた鎖が飛んで来る。
だが、かこはデバイスの銃とＶＳチェンジャーの二丁で正確に撃ち抜いていく。
「今です！」
「おう！」
『ｂｅｎｅｆｉｔ　ｓｅａｌｉｎｇ』
「これで、終わりだぁ!!」
「ぐぁはあぁ…!!」

ＶＳチェンジャーの封印の一撃が、真っ直ぐと怪物の胸に着弾し、一瞬で氷付けにする。

そして怪物の体から小さな光が出現し、それがＶＳチェンジャーに吸い込まれて消えた。

『ａｒｒｅｓｔ　ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ』

「任務、完了…！」

その言葉と共に、怪物は青年の姿になり、体から様々な文字が噴き出し、それらがある方向に向かって吸い込まれるように飛んでいく。

「おぉ、こいつは！」

「まさか、書庫や運び出された司書たちのところに飛んでるんじゃ…！」

それで何かを察したのか、かこは変身を解除して走り出した。

バンは変身解除した後、怪物だった青年を右京や魔導師たちに預けた。

怪物だった青年は右京たちから事情聴取を受けている間、バンはかこのところへ向

かった。
　そこで、出入口の近くになると、出入口からかこが出てきた。
「かこ…」
「あ…」
　顔をよく見ると、先ほどまで泣いていたのか、少し目が赤くて涙の跡があった。
「あの、今回はありがとうございました…。
　おかげで皆さんの記憶も戻りましたし、本も元通りです」
「いやいや、あれはお前がいたから勝てたんだよ。
　…それで、もう大丈夫なのか？」
「はい、お父さんとお母さんの記憶も戻りましたので。
　あの…、それで、なんですけど…」
「…？」
　かこが何かもじもじしながら何かを言いたそうにしているが、すぐに決心がついたのか、真っ直ぐとバンの目を見るように見上げる。
「あの、改めて、兼業ですがパトレンジャーとして、バンさんたちと一緒に戦っても、良いですか？」
「…！

おいおい良いのかよ、うちは確かに兼業もいけるけど、お前はやりたがらなかったじゃねぇか」
「はい、構いません。
転生者の中でも、今回みたいに、生きるためでも、誰かを傷付ける人がいるなら、見過ごしたくない。
それに、今回のような被害者を、出したくないんです…！」
「…そうか」
かこの覚悟を聞いたバンはニカっと笑い、太ももに懸架していたＶＳチェンジャーを取り出した。
「なら、今日から俺とお前は仲間だ。
そら、お前もＶＳチェンジャーを出せよ♪」
「は、はい！」
かこも慌ててＶＳチェンジャーを取り出した。
「じゃあ、これを互いに掲げるぞ♪
せーのっ！」
「…！」
二人は同時にＶＳチェンジャーが交差するように天井に向けて掲げる。

「あの、これって？」
「へへっ、何かこうやってたら、仲間になった感があるだろ？」
「…ふふっ、そうかもしれませんね。
　では、改めてよろしくお願いしますね、バンさん！」
「おう♪」
　改めて仲間になったことを確信した二人は互いに笑いあうのだった。
　こうして、かこは特命係のパトレンジャーに入隊したのだった。

サイドプロフィール：アストルフォ

これはかこがパトレンジャーになってから翌日の話。

ミッドチルダ、そこは魔法が科学で再現される世界で、管理局が指定した第一管理世界。

そこでは鳥のような生き物を連れたピンク髪で長い三つ編みを垂らした少女（？）が他の人と一緒にゴミを集めていた。

「…よいしょっと！

ふぅ、これでこの辺りのゴミは取れたかな、ヒポグリフ？」

ヒポグリフと呼ばれた生き物は少女（？）の周りを飛びながら頷く。

「おい嬢ちゃん、そっちのはもう全部集まったのかい？」

「はい、この辺りで見つけたのは、これくらいです」

「おぉ、こんなにたくさん！

嬢ちゃん、中々熱心だねぇ！

うちの若いもんにも見習って欲しいもんだ」

「いやいやそんな、ボクは大したことはしてないですよ。

それにボク、女じゃなくて男ですから」
「えっ？」
「じゃあ、ボクのボランティアもこれでおしまい！
じゃ、バイバーイ！」
思わぬ発言に呆然とする男性をよそに、少女（？）は先ほどとは打って変わってフランクな口調でその場を去った。
少女（？）、いや少年の名はアストルフォ・ローラン、１６歳。
ミッドチルダの魔法学校に通う学生で、ボランティアにも参加している。
見た目はどこからどう見てもボーイッシュな少女に見えるが、れっきとした男子で、趣味で女装をして、服を改造できるほどに手先が器用である。
それを証拠に、彼が着ている服は元々男子用の制服で、制服の改造が学校でも許されてることであることから、自ら改造して、ズボンもショートパンツにしたり、上着やカッターシャツにはフリルを付けたり、そのズボンの上からスカートみたいな装飾が付いていたりと、いかにもアイドルが着てそうな制服姿になっている。
また、彼の家は所謂大富豪であり家自体も屋敷で執事も一人ついていて、両親は管理局を通して様々な世界と貿易をしている。
彼の隣を飛んでいる鳥のような生き物はヒポグリフ、アストルフォの使い魔にして相

棒または家族である。
鳥のような生き物と言われるのは、鷲にも似た鳥でありながら馬の下半身を持っているからである。
元々はただ珍しい鳥だったのだが、幼い頃のアストルフォが死にかけだったヒポグリフを助けた時に光って変化してこのような姿になった。
それ以来アストルフォのことを慕うようになり、こうして傍を飛んでは何かとサポートをしてくれる賢い生き物なのであった。
「ふっふ～ん♪
さーて、今日はどうしよっかな♪
…？」
スキップをしながら歩いていると、ゴミ捨て場に子猫がゴミ袋の山に埋もれているのを見つける。
しかもよく見たらゴミ袋に挟まって苦しそうだった。
「…っ、大変だ！
待ってて、すぐに出してあげるから！」
アストルフォはすぐさまゴミ袋をかき分けて子猫を持ち上げる。
「もう大丈夫だよ、さぁ、体洗ってあげるから」

アストルフォは近くの公園の手洗い場で子猫の体を洗っていく。
子猫は体を洗われて気持ち良さそうに目を細めて、洗い終わると体をハンカチで拭いていく。
その後で子猫が自ら体を震わせて水分を落としていく。
「えへへ、もう大丈夫だよ」
「あっ、ここにいたんだ…！」
アストルフォが子猫を撫でていると、後ろから男の声が聞えてので驚いたのか、そのまま子猫はどこかに行ってしまった。
「あぁ行っちゃった…！」
アストルフォは男の声も気にも留めず子猫のことを考えてると、ヒポグリフがそれどころじゃないと言わんばかりに服を引っ張り振り向かせる。
後ろを振り向くと、そこにはフライトジャケットを羽織った刈り上げの男が息を整えていた。
「…あの、どちら様です？」
「はぁはぁ…、あーごめんごめん。
君が、アストルフォ・ローランくんだよな？」
「あってるけど、おじさん誰なんですか？」

「ふう、俺は亀山薫、時空管理局特命係の職員で、君に話があってきたんだ」
「…管理局の話ならお父さんたちの方が向いてると思うんだけどなぁ」
亀山薫と名乗る男に訝し気な表情になりながらも言葉を返す。
「じゃあ、君が以前倒れたことについて、心当たりがあるって言ったら、どうするんだ？」
「…、何でそんなことを…!?」
何で知ってるのかと眉を顰めるが、近くで子猫の悲鳴にも似た鳴き声が響き渡る。
「今のは、猫？」
「まさか、さっきの子猫じゃ！
ごめん、話はまた後で！」
それだけ言うとアストルフォは子猫の声が聞えた方向に向かって走りだし、亀山もついていくように走る。

「このあたりのはずなんだけど…！」
　しばらく走って辺りを見回すと、そこには黒い怪盗風の格好をした男が乱暴に子猫を掴み上げ、子猫は抵抗するように爪を立てて引っ掻こうとするがその小さな体格故全く届かない。
「…この世界にも転生者がいるとは思っていたが、まさか猫の特典を持ってるとはな」
「誰だお前は！」
「そこの君、今すぐその子を放せ！」
「民間人は黙っててくれ。
　こちらとしては面白い力を試すためにも必要なことなんだ」
「…なに、言ってるのさ」
「何をする気だ？」
「こうするのさ！」
　すると、黒い怪盗が懐から歪な仮面を取り出し、それを子猫の顔に取り付けた。
　瞬間、子猫は悲痛な鳴き声をあげ、体が青い炎に包まれ、二本の尻尾を持つ巨大な化け猫に変わった。
「これは、特典の暴走!?」

「暴走…？
　一体あの子に何をしたんだ！」
「何、ただの実験だ…！？」
　黒い怪盗が言いかけたところに足元に銃弾が撃ち込まれ、そこに変身したバンとかこがやってきた。
「そこのお前、動くな！」
「ほぉ、この世界には転生者の他にも戦隊がいるのか。
　だが…」
　そう言うと黒い怪盗は懐から銃を取り出すが、その銃の形はバンたちが持ってるＶＳチェンジャーに酷似しているが黒く、その上にはトリガーマシンとは別でダイヤルの付いた飛行機のようなアイテムがセットされていた。
「それってまさか、ＶＳチェンジャー！？
　でも、何か黒い」
「何で、あなたがそれを…！」
「さて、そこまで教えてやる義理はないな。
　ただ、これだけは教えてあげるよ」
　一息区切ると、黒い怪盗は銃を下に向ける。

「僕はルパンブラック、能力が作動するのか実験で来たのさ」
「実験…？
　じゃあ、お前がこの状況を作ったってのか!?」
「そうとも言えるね。
　いやあ、まさかただの実験のつもりで試したんだけど、ちゃんとこの子の特典を暴走出来て良かったよ。
　人間以外に試した事なかったからね」
　それだけ言って、ルパンブラックの足元が爆発し、姿を消した。
「なっ、消えた!」
『暴走させておいてなんだけど、早くその子を止めないと、死んじゃうよ？
　ま、せいぜい死ぬ気になって頑張りなよ。
　それじゃ、いずれまた会おう』
「くっ!」
　ルパンブラックを追いかけようとした途端、化け猫が立ち塞がり、燃え盛る前足でバンたちを凪ぎ払おうとする。
「…っ、危ねぇ!」
　バンは近くにいたアストルフォを庇い、ヒポグリフも空を飛ぶ形で避ける。

「おい、大丈夫か？」
「えっ、うん、ありがと…。
　それよりも、あの子、何でこんな！」
「あれは、特典の暴走なんだ」
「特典の、暴走？」
「あの、失礼ですが、どちら様ですか？」
　避けて物陰に隠れているときに、亀山が答える。
「君たちはバンくんとかこちゃんだな？
　俺は亀山薫、右京さんと同じ時空管理局特命係所属だ」
「右京さんの同僚、ですか？」
「あぁ、だが今はそんなことよりもだ。
　早くあれを何とかしないと…！」
「あれって、うわぁ…。
　あの特典、メラメラに燃えてんじゃねぇか」
「…一応私、再現で水の魔法使えますので、頑張りましょうよ」
「青い炎の化け猫に効くのかそれ!?
　とにかくやるしかねぇな、行くぞ!!」

自分たちで太刀打ちできるか不安を覚えながらも、バンたちは化け猫の元へと走っていく。
「あっ、待って！
その子は…！」
「アストルフォくん、今は出るな!!」
「うわっ！」
二人に制止をかけようとした途端に化け猫の尻尾が当たりそうになり、亀山は伏せさせる。
「くっ、放して…！」
「今君が出たら大火傷じゃ済まないんだぞ!?
死ぬ気か！」
「違うっ、あの子が今でも苦しそうにしているんだ。
邪魔になるかもしれないけど、放っておけないよ！」
「それはわかるけど、話を…！」
「失礼」
どうしても化け猫の元へと行こうとするアストルフォに言い聞かせようとした途端、その言葉と共に二人の間に右京が立っていた。

「右京さん…！」
「この人が…」
「申し訳ありません、周辺の住民の避難をしていたので。
　ところで亀山くん、彼がアストルフォ・ローランくん、ですね？」
「えっ、はい」
「なるほど、それで会った途端にこのような事態になったのですね。
　詳しいことは後でお聞きしますが、それよりも今は君ですね」
「…え？」
　右京はまっすぐとアストルフォを見つめる。
「…君には、戦うだけの力に選ばれたとならば、どうしますか？」
「それって、亀山さんが言ってた、ボクが倒れた時のことと、関係してるんですか？」
「えぇ、それを今、亀山くんが持っているんです」
　右京の言葉と共に、亀山が懐からＶＳチェンジャーとトリガーマシンを取り出した。
「これは、ＶＳチェンジャーとトリガーマシンっていうロストロギア。
　これが君のリンカーコアと共鳴したんだ」
「リンカーコアと共鳴したということは、これらが君を選んだ、ということなんです」
「…それがあれば、あの子を助けられるんですか？」

「ええ、やり方次第では」
「わかりました」
右京の答えを聞いた途端に、何の躊躇いもなく即座にＶＳチェンジャーとトリガーマシンを掴んだ。
その瞬間に使い方が頭の中に流れ込み、苦悶の表情を浮かべ、それを見ていたヒポグリフは心配そうに見ていた。
「おやおや、これは…」
「これで、ボクも戦えるんですよね…？」
「ええ、間違いなく。
しかし、なぜ君は即座に戦うことを選んだのですか？」
「…ボクはただ、あの子を放っておけないんです。
それに、今も泣いてるかもしれないのに、何もできないなんて、ボクは嫌なんです…！
どうせやらずに後悔するくらいなら、迷わず手を伸ばして、助けたいんです!!」
「なるほど、それが君の考えですか。
…良いでしょう、では向かってください」
「はい！

…ヒポグリフも、それで良いよね？」
返事をするように、ヒポグリフは深々と頭を下げ、それを確認したアストルフォをＶＳチェンジャーとトリガーマシンを構えた。
それを確認したヒポグリフはその場から離れるように飛んだ。
【３号！
パトライズ！』
「警察チェンジ！」
【警察チェンジ!!】
【パトレンジャー!!】
アストルフォはＶＳチェンジャーにトリガーマシンをセットして変身し、化け猫に苦戦しているバンたちの元へと走っていく。
「ねぇ！」
「…！」
「あ、あなたはさっきの！」
「ボクはあの子を助けたいんだ、だから一緒に戦わせてよ！」
「良いも何も、あいつクソ熱い上に素早いんだぞ!!」
「私も、水の魔法を使おうにも避けられてしまいます…」

「…だったら、ボクとヒポグリフで動きを止めるよ。
少し待ってて！
ヒポグリフ、幻獣召喚!!」
アストルフォの叫びと共に、ヒポグリフは雄叫びをあげながら大型の鳥の幻獣へと変わる。
『ｓｐｅａｒ　ｆｏｒｍ』
そこからさらにアストルフォはヒポグリフに跨り手には黄金に輝く馬上槍のデバイスがあった。
「…よし、行くよ！」
ヒポグリフは化け猫の周りを飛びながら翻弄していく。
化け猫はヒポグリフを叩き落そうとするが当たる直前に瞬間移動するので避けられる。
そこからさらに化け猫は振り払うために俊敏な高速移動を行うが、アストルフォとヒポグリフはそれよりも早かった。
「悪いけど、これ以上君を苦しませるわけにはいかないんだ！
行くよ!!」
アストルフォが馬上槍を構えた瞬間、馬上槍は光輝き、その光と共に化け猫の足を一

閃する。
　すると化け猫の足は力が入らなくなりそのままその場に倒れ込む。
「これなら、今だよ！」
「はい！
　リプロダクション!!」
『ｒｅｐｒｏｄｕｃｔｉｏｎ　ｗａｔｅｒ　ｓｐｌａｓｈ』
「だったら俺は縛り付けた上で力を吸収するぜ！」
『ｍｕｌｔｉ　ｆｏｒｍ』
　かこが水の魔法を再現して大量の水をかけていき、その上からバンが多節棍にしたデバイスで縛り付けて自身の魔法で少しずつ力を吸収していく。
「あとは、ボクも行かないとね」
『ｓｗｏｒｄ　ｆｏｒｍ』
　アストルフォの馬上槍は剣へと変わり、さらに剣の刀身がいくつもの関節に分かれて蛇腹になってバンと同じように縛り付けていく。
　ヒポグリフもそれに加わるように化け猫の周りに竜巻を発生させて全身に水が行き渡るようにする。
　足の力が入らなくなり、縛られた上で鎮火されて力を吸収されてことにより本格的に

弱っていく。
それを確認してから全員は魔法やデバイスを解除する。
「これで、終わらせるよ！」
『ｂｅｎｅｆｉｔ　ｓｅａｌｉｎｇ　ｓｅｃｏｎｄ』
アストルフォはＶＳチェンジャーを回転させて二回トリガーマシンの引き金を引く。
そして再び元に戻し、化け猫に目掛けて撃ち込んだ。
瞬間、化け猫の姿は砕け散り、子猫が地面に倒れ込み、子猫から出た光はトリガーマシンに吸い込まれるように消えていった。
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ』
アストルフォは変身解除して、すぐに子猫に駆け寄った。
「ねぇ君、もう大丈夫だよ！
しっかりしてくれ、目を開けてくれよ！」
子猫を抱き締めながら声をかけるアストルフォ。
その声が届いたのか、子猫はうっすらと目を開けて小さく鳴いた。
「…っ、良かった！
本当に良かったよぉ…！」
「お前、結構優しいんだな」

「…そんなんじゃないよ、ボクはただ、この子を放ってはおけなかったんだ、そりゃあ会ったのは今日が初めてだけどさ」
「じゃあ、私が魔法でこの子の治療をしますね」
「うん、お願い」
かこに子猫を預けると、右京と亀山が歩み寄ってきた。
「お疲れ様ですアストルフォくん。
まさか、このような形で子猫を助けるとは驚きでしたよ」
「元々あの子は何も悪くはなかったので、そうしただけですよ、そう思えたらすぐにさっきの方法ができたんです。
それに…」
アストルフォはその拳を強く握る。
「あの子にあんな目に合わせたあの黒い怪盗は絶対に許さない、絶対に取っ捕まえて償わせたいんです。
だから、ボクもあなたたちの元で戦っても良いですか？
元々、そういう話でボクに会いに来たんですよね？」
「あっ、そうなんだよ！
それで君の家に行っても出掛けてるって聞いたし学校とかボランティアとか探し

回って大変だったんだよ！」
「亀山くん、大変なのはわかりますが、何事も冷静に対処してこそ、ですよ？
さて、君がそう言うのでしたら…」
右京はアストルフォに手を差し伸べる。
「ようこそ、時空管理局特命係へ。
これから君たち三人は警察戦隊パトレンジャーとして、転生者を取り締まるためにも、その力を僕たちに貸してください」
「望むところ、ですよ」
アストルフォは力強く右京の手を掴み微笑んだ。
こうして、アストルフォは特命係のパトレンジャーに入ったのだった。

プロフィール２：警察は現象に興味を抱く

「そういえばそういうこともありましたねぇ…」

右京は三人の資料を見てそう言った。

あれからというもの、特命係及びパトレンジャーはアースラの一室に拠点を置いて活動している。

部屋自体は５人全員で使っても余裕があるくらいの広さで捜査に必要なものはもちろん、各自の私物の持ち込みも許可してある。

捜査するに当たって、管理局職員に転生者用探知機を用意して協力してもらったり、バンたちにはバリアジャケットの応用で仕事になると私服から切り替わる専用の制服を用意したり、三人を現場付近に転送するようにしたりと、準備を行った。

たまに自らアースラや特命係に来ては私物の持ち込みやそれぞれの魔法の修行をしたりプライベートで雑談に来たりするようになった。

その際、歳が近いこともあって、かこはアストルフォに対して砕けた口調で話すようになった。

バンもフレンドリーに話しかけたりと良い雰囲気である。

アストルフォに至っては迷惑をかけない程度に可愛らしい装飾を部屋に飾り付けたりしている。
ちなみにアストルフォの一件で助けた子猫は管理局で保護されており、アストルフォも時々顔を出してはじゃれたりしている。
そう言うことを思い返しているときに、映像と通信が入った。
『右京さん、少しよろしいですか?』
「これはこれは、リンディ提督。
どうされましたか?」
『もうすぐ、後1日もすればアースラは地球に到達します。
ですので事前に彼らにも説明してください』
「わかっております。
それでは、失礼」
映像に映っていた緑髪の女性であり、アースラの提督を勤めるリンディ・ハラオウンとの通信を終えて、映像もプツリと消える。
「さて、亀山くんも呼んでから、彼らを呼びましょうか」
そうして右京は連絡するのであった。

「それで、話って何ですか右京さん」
バン、かこ、アストルフォ、亀山は特命係の部屋に集められる。
「皆さん、お集まりくださってありがとうございます。
亀山くんは知っていると思いますが、後1日でアースラは地球に到着します」
「地球、ですか？」
「確か、２年前に闇の書とジュエルシードにまつわる事件が起こった世界ですね」
「おや、よくご存知で」
「これでも、無限書庫司書ですから」
「ねぇ、その二つにまつわる事件って何なの？」
「今はそれどころじゃねぇだろ？
…ところで、何で地球に？」
アストルフォはかこに事件のことを聞こうとしてバンに諌められる。
「そうですねぇ…」
本題に入ろうと、右京は口を開く。

「実は、最近地球では転生者による犯行が相次いでいましてねぇ。
中には、特典が暴走したことによる騒動もあるのですが」
「暴走…」
暴走という言葉を聞いて子猫のことを思い出したのか、アストルフォは暗い表情になる。
それについてはバンもかこも同じだが、アストルフォに至ってはルパンブラックの手で特典が暴走させられる場面を目の当たりにしたこともあって、かなり深刻に受け止めている。
「それで、それを取り締まるためにも地球で俺たち特命係は活動することになったんだ。
そこで地球で活動するに当たって、この街を拠点に動こうとしてるんだ」
そう言うと亀山は端末からある街の資料を取り出した。
「海鳴市？
何でそんな街に」
バンは何で海鳴市を拠点にしようとしたのか疑問を持って質問する。
「実はその街では、優秀な協力者がいましてねぇ。
それでその方たちと共に転生者の捜査を行えば、地球での活動もしやすくなるのです」

「へぇ、それはかなり頼もしいんじゃないですか！」
「でも、その協力者って誰なんだろ？」
「それは現地で会ってからのお楽しみですよ。
　さて、実はもう一つ、地球に行く理由があるのですよ」
　話を切り替えて、右京は別の資料を取り出した。
「これは転生者に関することかどうかはわかりませんが、以前地球では『ルナアタック』と呼ばれる月が落ちてくる現象が起こったそうでしてねぇ」
「ルナアタック？」
「文字通り、月が地球に落ちてくる現象ですよ。
　とはいえ、地球ではどう捉えられてるのかわからないため、こちらでそう呼んでるのですが」
「うげぇ、そんなの怖いですよ、月が落ちてくるなんて。
　でも、そんな現象が起こったのに地球は何ともないようですけど？」
　アストルフォは若干引きつりながら質問した。
　もし月が落ちてきたという話が本当だったら、何で地球は平気なのか。
　いや、もしそんなことがあったというのなら、何で管理局は落ち着いていられるのか。
　そう考えてる時に右京は返事をする。

「そのことなんですが、詳しいことはわかりませんが、その月が落ちてきたと思ったら、何らかの方法で元に戻ったのですよ。

僕としては、何故月が地球目掛けて落ちてきたのか、その方法とは一体何だったのか、それが気になりましてねぇ」

「…言われてみれば、確かに」

「それに、本当にどんな方法で月を戻したのかは不明なのですが、その際にある反応が観測されました。

それがＶＳチェンジャーにも酷似した、ルパンブラックにも似た反応です」

「あいつか…！」

「…！」

「ルパンブラック…」

三人はルパンブラックの名前を聞いて警戒する。

もしそうだとしたら、ルパンブラックのような特典を暴走させる存在が、地球のどこかにいるかも知れないからだ。

「しかし、それはあくまでも可能性の話です。

否定はできませんが、僕は地球で、このことを調べてみようと思うのです」

「じゃあそれでしたら、俺がバンくんたちのサポートしますよ」

「ええ、僕が行けない時は、そうしてもらいますよ亀山くん」
「了解っす！」
「それでは皆さん、今言ったことを持って、明日僕たち特命係は地球へと降ります。
何か質問はありますか？」
右京は皆を見回し、誰か質問あるのかを確認した。
しかし、誰も手を上げてる様子はなかった。
「…では、僕からは以上とさせていただきます。
後は各自準備をしてそれぞれの場所に戻ってください」
『了解！』
その言葉を言ってから、バンたちはその場を後にした。
「さて、この『ルナアタック』、一体地球では何が起こったのでしょうかねぇ」
一人残された右京は、資料を見てそう呟くのだった。

プロフィール３：　少女たちとの邂逅により事情を知る

翌日、右京、亀山、バン、かこ、アストルフォ、クロノは地球に降りて、海鳴市の公園で待機していた。
「それにしても、協力者って誰なんだろうな？」
管理局の、職員なんだよな？」
「恐らくですけど…」
「それにしても、ここが海鳴市かぁ。
綺麗なところだよねヒポグリフ」
「アストルフォくん、今回は会いに来たんだから良いけど、仕事以外でヒポグリフをあまり連れていくなよ？
ここじゃめちゃくちゃ珍しいしその見た目だと目立つから」
「…おや、どうやら来たようですよ？」
右京の言葉に振り向くと、三人の少女がいた。
「お待たせしました！」
「あっ、お帰りフェイト。

彼らがこの街で君たちと協力してくれる、特命係及びパトレンジャーだ」
そう言うとクロノは右京たちに挨拶を促すように顔を見る。
「初めまして、僕は時空管理局特命係係長の杉下右京と言います」
「同じく特命係係長補佐の亀山薫っす、よろしく」
「俺は湖光バン、特命係職員兼アースラの湖光食堂のコックをやらせてもらってるぜ」
「わ、私は特命係兼無限書庫司書をやらせて頂いてます、夏ノ森かこと言います！」
「ボクはアストルフォ、アストルフォ・ローラン！
一応特命係だけど、ミッドの学生だよ」
右京たちが挨拶をしたので、少女たちも挨拶をする。
「高町なのはって言います！
よろしくお願いします！」
「初めまして、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです。
嘱託魔導師です」
「私、八神はやて言います。
よろしゅうお願いします」
「僕のことは互いに知ってるから省略させてもらうよ。
さて、挨拶は済んだし、そろそろ本題に入ろう。

フェイト、頼んでおいたあれどうなってるかな？」
「うん、これだよね」
金髪の少女、フェイトはクロノに言われて懐から端末を取り出して情報のデータを見せた。
「以前頼まれたルナアタックの件は、この日に月が落ちようとしたことも、それが突然元に戻ったことも観測されたのは確かです。
依然としてその原因も、戻った時に何が起こったのかはわかりません」
「でも、その時にある反応があったんです」
茶髪の少女、はやてがフェイトの言葉を付け加えるように言って、フェイトの端末を操作する。
そこには以前バンたちが見たルパンブラックに似た反応があった。
「これは…」
「ルナアタックの時に確認されたルパンブラックとよく似た反応です。
しかもこの反応が３つ同時に確認されてるんです」
「３つも？
でもそれってまさか…」
「ルパンブラックと関係してるかわからないんですけど、これって恐らくルパンレン

ジャーのことじゃないかって」
『ルパンレンジャー?』
　はやては皆の疑問に頷くと関連資料の映像を開く。
　そこにはルパンブラックとよく似た赤・青・黄の三人の怪盗が映っていた。
「別の街で確認されてる怪盗団なんですけど、何でも犯人を改心させてるとか」
「犯人を改心?」
「はい、実際に彼らが介入した際、その犯人からあるものを奪うことで、その今まで悪事を働いていた犯人はまるで憑き物が落ちたように素直に投降に応じて罪を認めてるようです」
「その犯人とやらは、もしかして転生者のことですか?」
「可能性はあります」
「…そう言えばこの三人のこれって、ＶＳチェンジャーだよな?」
「でも、ルパンブラックみたいに黒くはないんですね」
「…改心させてるってことは、悪いやつじゃないのかな?」
「…現時点ではまだルパンブラックとの関係はわかってはないんですけど、ただこちらで気になる点があるんです」
「気になること?

それは一体何でしょう?」
はやては少し困った様子で端末を動かすと、先ほどのルパンレンジャーたちの当時の反応を示したデータを出す。
「…特に何も変わった所はないみたいっすけど、何かあるんすかね?」
「おそらく、彼女が言いたいのは、こう言うことではないですか?」
右京ははやてのデータに指を指す。
三人の反応は確かに映されているデータなのだが、その当時の反応の時間経過などを記されていた。
そこで詳しく見ると、まるでそこに何かがあるみたいに、透明なものを避けるように動いたり、それとぶつからないように距離を置いたりしているようだった。
「この動きが、どうかしたんですか?」
「…予想ですけど、このルナアタックの時に、誰かが一緒にいたかもしれないんです。
その誰かが、こちらではわかってはいないんですけど」
「恐らく、ここだけ不自然な反応の無さを見る限りでは、何者かがかき消した、とでも言いましょうか。
その存在を知られてはならないと、そう言わんばかりに。
それにもしルパンレンジャーと何者かが共闘していた上で消えてるのなら、表には出

ない何らかの組織もいるかと」
「…ルナアタックといいこの不自然な反応といい、今地球じゃ何が起こってるんだ？」
「それは、私たちにもわからないんです。
　ごめんなさい」
　バンの疑問に答えれないことにはやては謝る。
「…そう言えばこのルナアタック事件が終わってから、まだこの海鳴市では確認されてないですけど、こういうのが確認されてます」
　はやての次に、入れ替わるようにツインテールの少女、なのはが端末から画像を出す。
　そこには見たこともないような生き物が映っていた。
「…何だよこいつら」
「これはノイズです」
「ノイズ？」
「はい、ノイズとはこの日本の政府が指定した災害のことです」
「災害？
　この生き物みたいなのが？」
「はい、どういうわけか人間だけを襲い、襲われて触れられた人間はノイズもろとも灰になるんです」

『っ!?』
「お、おいちょっと待てよ!?
　人間を灰にするって!」
「遺体すら残らないなんて…!」
「人間だけを襲うって、一体何なんだよこれ!?」
「右京さん、これって、相当まずいやつじゃ…!」
「皆さん落ち着いて。
　…ところで、確認されてるということは、何か対策はないのですか?」
　バンたちが驚愕してるが、右京は冷静になのはに質問する。
「…一応こちらで反応が確認された場合に、住人の避難とノイズが出現してる地域を結界を貼ってます。
　ノイズは人間がいないとその場に留まるし、時間が経てば消滅しますので」
「…避難するのも結界を貼るのもわかるんすけど、中に入って戦うってのは、どうだったんすか?」
「それが…」
「私となのはちゃんで一度砲撃で試したんですけど、どういうわけか通用しなくて…」
「私も遠距離の魔法は使えますが、恐らくそれも…」

「…あぁ、それは、すいません」
なのはたちの申し訳なさそうな様子に謝る亀山。
つまりは魔法は通用しないのだ。
だからこうするしか方法がなかったのだ。
それに、よく考えたら魔法が通じない上に触れれば灰にするような化け物に、魔導師とはいえこんな小さな女の子に遠回しに戦えというのも、酷な聞き方だったと内心思うのだった。
「恐らくその理屈ですと、地球で確認される兵器ですらも、通用するかどうかも怪しいですねぇ」
「そう、ですね。
…あと、あのルナアタックの後にいくつかこの海鳴市に引っ越してきた人たちがいるそうです」
「わかりました。
では、早速ですが転生者の取締りも含めてこれらの調査に向かいましょうか」
「この街で調べるなら、私たちも一緒にいきます！
皆さん、地球もそうですけど海鳴市に来るのは初めてですよね？」
「そうして頂くと助かります。

しかし、これだけの人数で一緒に行動するのもそうですし、バンくんたちは彼女たちに着いていってもらって良いですか？

僕たちはノイズとこの無反応の何かについて調べてみますので」

「けど街に向かうなら私服に切り替えておいた方がいい。

その制服だと、目立つからな」

『了解！』

こうして、バン、かこ、アストルフォはなのは、フェイト、はやてに案内される形で海鳴市で調査を行い、右京、亀山、クロノはアースラに残ってノイズやデータのことについて調べることになった。

果たしてバンたちパトレンジャーは、この海鳴市に足を運び、その瞳に何を見るのか、それはまだ彼らは知らない。

プロフィール４：警察は喫茶店に寄り出会う

「それにしても、こうして海が見えるって何だか気持ちが良いよね」
バン、かこ、アストルフォ、なのは、フェイト、はやては海鳴市を見回している。
右京たちと別れてから見回しているが、特に異変もなく、平穏な雰囲気だった。
ちなみにバンたちはパトレンジャーの制服ではなく、各々の私服で、ヒポグリフはいくら小さくても見た目が見た目なだけあって地球では目立つためアースラで留守番している。
「普段はこんな感じでのどかな街なんです。
たまに暴走したり暴れたりする転生者を発見してはそれに対応してますが」
「それに、転生者じゃないんですけど、先日のルナアタックで他の街では被害の影響で何件かこの街に引っ越してるそうなんです」
「へぇ…」
「それで、この近くにその一つがあそこらしいんです」
はやてがそう言って指を指した方向を見ると、そこには喫茶店があった。
「ｎａｃｉｔａ…？」

「ここ、前は別の街で別の名前だったらしいんですけど…」
「とりあえず、入ってみようよ！
　少し小腹も空いてるしさ！」
「あ、おいアストルフォ!?」
「アストルフォさん!?」
　アストルフォがｎａｃｉｔａへと走っていくので、それを追いかける形でバンたちも入っていく。

「いらっしゃいませ…」
「６名で」
　ｎａｃｉｔａに入っていくと、厨房の奥から褐色の青年がバンの顔を見て若干ひきつりながら顔を出して、席を案内される。
「では、ご注文は後程で」
「その、その前に少し良いか？」
「…何か？」

席を案内した青年は厨房へと戻ろうとして、そこでバンが引き留めて話を聞こうとする。

一方アストルフォも、話を聞こうと姿勢を変えていた。

そこへ、なのはたちと同い年かそれよりも下なのか、金髪の少女が水を配ってくる。

「ほい、水じゃ」

少女はややそっけない様子でアストルフォたちに水を配って、その場から去ろうとした。

「ねぇ君！」

「…何じゃ」

鬱陶しそうな目で睨むが、それでもお構い無しにアストルフォは話しかける。

「君ってこの店の子？」

「そうじゃが？」

「にひひ」

アストルフォはニカッと笑いながら少女の頭に手をポンと置いてヨシヨシと頭を撫でる。

「まだ小さいのにお店のお手伝いしてるなんて、えらいえらい♪」

「ブチッ」

アストルフォが少女の頭を撫でてると、少女の顔に青筋が浮かぶ。
その瞬間。
「んがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
「ぎゃふ!?」
少女は、自分よりも体格の大きいアストルフォの体を持ち上げて、その前に背中を仰け反らせそのままアストルフォの頭を思いっきり床に叩きつける。
「アストルフォ!?」
「アストルフォちゃん!?
…すごいこれがジャパニーズオーシャンサイクロンスープレックスホールドなんですね！」
バンとなのはたちが驚き、かこはアストルフォの心配してる一方で少女がかけた技に目を輝かせている。
「何だこれ…?」
その時に、この店の店員なのか、黒髪の青年が入ってきた。

プロフィール５：謎の少女は少年の好奇心を掻き立てる

アストルフォが気絶させられた休憩室に、店の店員であった青年二人が一緒に来ていた。
「うちの連れが迷惑かけて悪かったな」
「いや気にするなよ、俺も今来たところだから状況が呑み込めてないなら」
ｎａｃｉｔａでアストルフォが叩き付けられた後、スタッフの休憩室にアストルフォを寝かせた後バンたちは店に迷惑をかけたことを謝る。
「ちなみに、何でこんなことに？」
「そう言えば…、あっ！
あの、バンさんがそちらの人に話しかけようとしたら、金髪の子にすごい技を掛けられてるのを見ました！」
「金髪の子か？
だけど、あの子の体格じゃ、そんなの無理だろ」
そう言いながら、店内にいたフェイトの事を思い出したのか、青年はそのままその事を否定した。

魔導士という事情を知らない彼からしたら、当たり前の意見であり、体格差があり、そのような事ができないと考えるのは当たり前だ。
「あと、なんだか古風な喋り方をしていたような。
見た目と喋り方が全然違ったような、あれ？」
その特徴を聞いた瞬間、凄い冷や汗をかいていた青年はすぐに下の方を向く。
「どうしたんだ？」
「なんでもない」
「いや、何かあるだろ」
「なん・でも・ないっ！」
「あっはい」
何かを隠している青年だったが、その威圧感に思わず返事をする事しかできなかった。
「そう言えばそこの白髪頭のあんた、さっき俺に何か聞こうとしてなかったか？」
そうして威圧されている間に店員の一人である褐色の青年が話しかけてきた。
「ん、あぁそうだったな。
なぁ、あんたらは確かこの町の外から来たのか？」
「まぁな。

この前に月が落ちる事件があっただろ。
そこで店が潰れて、たまたまこっちで良い物件があったから、こっちに移ったんだ」
「そうなのか俺たちもこの町に来たのは今日が初めてなんだけどな、それで散歩がてらここに寄ったんだ。
それでこの前のニュースでその事についてが気になっていてな。
なんか知らないか、噂程度だけど、例えば黒い怪盗とか」
そう呟くと一瞬、目を見開くが。
「黒い怪盗か。
まぁ俺達も噂程度だからな。
でも俺達が知っているのは三人組の怪盗だけどな。
それに当時はノイズが町中に溢れて、大変だったから、そんなのを見ている暇はなかったからな」
その言葉を聞きながら、何か隠しているのかと思った。
だが、当時の状況についてもクロノから聞いたのと同じであり、何よりも嘘はついていない事が分かった。
「そうか…、じゃあ邪魔したな。
今度また立ち寄ったらお詫びに何か持ってくるよ」

そう言ってバンたちは、休憩室で未だに寝ているアストルフォを引きずって、ｎａｃｉｔａを後にした。

「お前、問題をあんまり起こすなよ」

そう、青年が影に向かって喋っていた事に気付かずに。

そしてそのあと、気が付いたアストルフォはというと。

「ねぇねぇ！

あの店にいた子あんなに小さいのにすっごい力持ちなんだね！

また皆で行こうよ！」

「お前本当に懲りねぇな!?

というよりも、いなかったという話じゃなかったのか？」

トラウマになるどころか、後日ｎａｃｉｔａで謎の少女に会う気満々であった。

これにはバンたちも呆れた目で見つめるしかなかったのであった。

プロフィール６：沈殿と隕石の中を少年少女は駆ける

「ふんふんふふーん♪」
「…」
ｎａｓｉｔａを後にしてから海鳴市を見て回ったが、あまり良い情報が集まらなかった。
しかもそのほとんどが先のｎａｓｉｔａと同じような情報だった。
それ故、三組に分かれて情報収集することになり、現在アストルフォとはやてが行動を共にしていた。
「なぁアストルフォさん、頭の怪我はもういいんですか？」
「大丈夫だよ！
むしろさっきのあの子が力持ちだったのが驚きで痛みが引いちゃった！
地球の子供ってすごいんだね！」
「それは何か違うと思いますけど…」
はやてはｎａｓｉｔａでのことを思い出して少しげんなりしていた。
「…それにしても、この海鳴市ってさ、改めて見たけど海の景色が綺麗だね…」

「そうですね、ここは海が近いですし。
　そう言えばミッドにも海がありましたよね」
「うん、とっても綺麗なんだ。
　でも、ボクはここの海も綺麗で好きだな」
「そうですか…」
「さてっ、今こうしてる間にもバンたちも何か情報掴んでるかもしれないし、ボクたちも頑張ろう！」
「うん、そうですね！」
　アストルフォがスキップし、はやてがそれを追いかけるように移動するが、その時だった。
「え？」
　急に影ができたので上を見ると、それは小規模の隕石だった。
「危ないっ!!」
「きゃっ！」
　アストルフォははやてを突き飛ばして自身も回避する。
　先ほどまで二人がいた場所に小さいクレーターができていた。
「今のは、一体」

「ちっ、外したか」
「…っ、君は！」
　振り返ると一人の青年がいた。
「何で今のでミンチになってくれねぇのかな？」
「その言い方だと、君が今の隕石を落としたのかい？」
「あぁそうさ！
　見た感じお前らが恵まれてるように見えたんでな、ムカつくんだよねそういう奴ら見てるとさ」
「そんな、せやかてこんなことする必要ないやんか！」
「それがあるんだよ、俺には！
　俺は生前とことんついてなかったんだ。
　だからこの力を使って俺よりも恵まれたやつらをぶっ潰すんだよぉ!!」
「君、転生者だったのか！
　だけど、こんなことして、良いはずがない！
　行くよ！」
「わかってます！」
【３号！】

【パトライズ！】
「警察チェンジ!!」
【警察チェンジ!!パトレンジャー!!】
「ほな、私も！
セットアップ!!」
二人は変身し、それぞれの武器を構える。
「変身するなんてな、どこまで恵まれてんだよてめぇらは!!」
「っ、アストルフォさん！」
「うわっ!?」
瞬間、アストルフォとはやての足元が窪むように消えて、咄嗟にはやてがアストルフォの手を握って空を飛ぶ。
「あ、危なかった…！
ありがとうはやてちゃん！」
アストルフォはブランコみたいに体を大きく振り上げて、それを察したはやてが手を放すと同時にジャンプし、そのまま青年との距離を詰める。
「やぁ！」
「ふっ！」

パトメガボーで殴りかかるが青年は後ろにジャンプして避け、特典の力で隕石を落としにかかる。
「うおっ、よっ、はっ！」
先ほどよりも小振りだったからか、軽くステップを踏みながら避けていく。
「あぁもうしつこい、な！」
『ｓｗｏｒｄ　ｆｏｒｍ』
剣モードにデバイスを展開し、蛇腹になった刃で鞭を振るうように隕石を小間切れにする。
「アストルフォさん、伏せてください！
とりゃ！」
「うおっ！」
瞬間、後ろから大量のビームが飛んできて、それらが隕石を消滅させる。
「す、すごい…！」
これがはやてがやったのだと思うと、驚きながら先ほど隕石が消滅した空を見上げる。
「てめぇよそ見たぁ随分余裕だな！」
「しまっ！

…ヒポグリフ、幻獣召喚!!」
足元が穴になって落ちようとしたが、アストルフォはヒポグリフを呼び出しその場から離脱する。
「ありがとう、ヒポグリフ！
…よーし、反撃開始だ！」
『ｓｐｅａｒ　ｆｏｒｍ』
「とりゃ！」
ヒポグリフから飛び降り、そのまま青年に向かって急降下する。
「なっ!?」
特典が間に合わず腕でガードしようとするが、アストルフォは青年の足を掠めて通り過ぎた。
「…っ、どこ狙って…！
何だ足が!?」
「ボクのこの槍に触れるとしばらく立てなくなるよ！
はやて!!」
「わかってます！
そりゃ!!」

はやての本のページがめくれ文字が光り、それと同時にはやての背後に複数の光が出現し、手に持ってる杖が振った方向にビームとなって青年に向かっていく。
「ちっ！」
青年は負けじと隕石を落とし、ビームに破壊される形で防ぐ。
「舐めるなよ、お前みたいな恵まれてるガキなんかに…！」
「さっきから恵まれてるとかなんなんだよ！
ボクたちが何したって言うんだ！」
「はっ、てめぇに関しては金持ちみたいな匂いがするからだ。
でもな、一番気に食わねぇのはそこのガキだ、八神はやて！」
「わ、私の名前を知ってる？」
「そりゃあなぁ！
俺には生前の知識でお前のことを知ってる！
だからこそ嫌いなんだよ！」
「…っ、どういうことなん!?」
「俺は生前お前と同じように障害を負って一人で生きていくしかなかった。
けどお前はっ、あの夜天の書を手にしたことであいつらという家族ができて幸せそうだった！

けど俺にはそんな資格もなければ家族と呼べるやつはいなかった！
だからお前のような存在が反吐が出るんだよぉ!!!」
「っ！」
はやてが動揺している隙に、力を発動しようとする青年。
「お前は幸せになるべきじゃねぇ、恵まれなかった俺のために、地獄のドン底で這いずってりゃ良いんだよぉ!!」
「もういい、君はそれ以上喋るな」
『ｂｅｎｅｆｉｔ　ｓｅａｌｉｎｇ』
「は？」
そんな声をあげた瞬間、青年は氷付けになって、特典が回収される。
『ａｒｒｅｓｔ　ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ』
「…君が恵まれてなかったのはよくわかった。
だけど、夜天の書だかなんだか知らないけど、彼女に当たるなよ」
アストルフォはＶＳチェンジャーからトリガーマシンを外して変身を解除しながら凍り付いた青年に言う。
「それにボクも身なりはそれなりに良いとは思ってるけど、ボクはボク自身の意思で君たちと戦うんだ。

そこには恵まれてる恵まれてないなんて、ないんだよ」
それだけ言うとアストルフォは未だに動揺してるはやてに近付く。
「…大丈夫かい？」
「え、は、はい…」
「そっか…、それなら大丈夫だね」
「…アストルフォさんは、私のこと聞かないんですか？」
「君が動揺してるなら、そこに何か事情があるからだろ？
何があったかは知らないけど、言いたくないなら、言わなくてもいいよ」
「…」
「それに、夜天の書だか何だか知らないけど、管理局はそのこと知らないとは思わないし、何より君は魔導士としてなのはちゃんやフェイトちゃんたちと一緒に、ボクたちと協力してくれてるんだろ？
なら、それで良いじゃないか！」
「…！
おおきに、です！」
「さて、こんな暗い話はこれでおしまい！
さぁ、こんなことになっちゃったんだから早くアースラに連絡して、バンたちと合流

しよう！」
「はい！」
アストルフォの励ましに元気が出たのか、明るい笑顔ではやても返事をし、バンたちと合流した。
「でね聞いてよ！
いきなり転生者に襲われたけど、はやてちゃんたらすごいんだ！
何かこうビューンってなってズドドーンって転生者の攻撃を防いじゃうし強いんだよ！」
「何なのそれ擬音ばかりで全然わからないよ!?」
「あはは…」
バンたちはアストルフォたちと合流するが、アストルフォの擬音だらけの説明に困惑し、はやては苦笑いしていた。
ちなみにバンたちも話はしたが、この海鳴市には確かに転生者がいるし、ルナアタックで外からやってきた人たちやお店があるがそれ以外は何もなかったし、転生者も普通に暮らしているそうだった。